

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第186集

たかなべじょうさん の まる あと
高鍋城三ノ丸跡

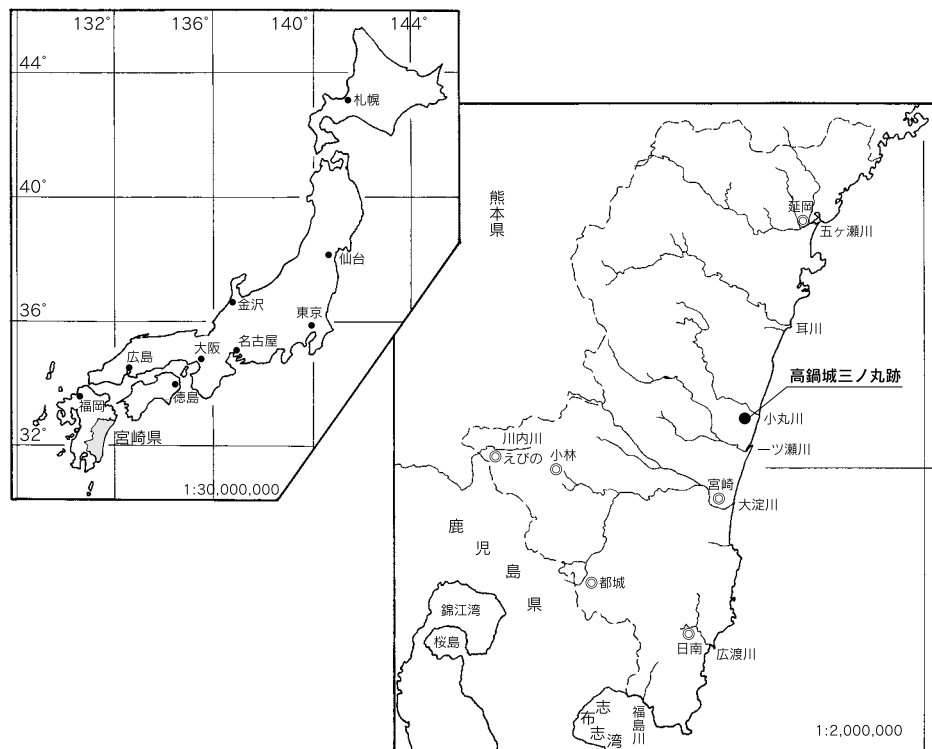
高鍋農業高校実習施設緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

宮崎県埋蔵文化財センター

たかなべじょうさん の まる あと
高鍋城三ノ丸跡

高鍋農業高校実習施設緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

宮崎県埋蔵文化財センター



高鍋城三ノ丸跡遠景（調査地東方向より高鍋城を望む）



高鍋城三ノ丸跡遠景（調査地南西方向より蚊口浜方面を望む）



高鍋城三ノ丸跡出土陶磁器



高鍋城三ノ丸跡出土木製品

序

宮崎県教育委員会では、県立高鍋農業高等学校の実習施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

高鍋藩は現在の高鍋町周辺だけではなく、北は美々津、西は木城町のほか、飛び地として国富町の一部や串間市の全域を含む地域を領有しており、藩主秋月氏の居城である高鍋城を調査することは、近世日向を考える上で非常に重要であるといえます。

また、高鍋農業高等学校は、100年を超える歴史をもつ伝統校であり、現在の校舎がある敷地は、高鍋藩の藩校であった明倫堂や、家老であった泥谷氏の邸宅の跡地を含みます。

今回の調査では、「ねの正月 泥谷」と墨書された箱蓋、下駄などの木製品、近世の陶磁器など、当時の上級武士の生活を忍ばせる多くの遺物が出土しました。また、中世期の流路や溝の跡など、高鍋城に土持氏や伊東氏が居城した時期の遺構も見つかっています。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 福永展幸

例 言

- 1 本書は高鍋農業高校実習施設緊急整備事業に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県児湯郡高鍋町大字上江1339-2に所在する高鍋城三ノ丸跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎県教育委員会学校政策課の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成20年5月12日から7月18日まで（現地調査30日間）行った。発掘作業に従事した発掘作業員は次のとおりである。神山照雄、河野一代、栗井常雄、桑原まり子、後藤司、高千穂昇、中山忠幸、西崎るり子、野村りよ子、森澄江、吉田勇（以上11名、五十音順、敬称略）。
- 4 現地での実測等の記録は和田理啓及び森田利枝が発掘作業員の協力を得て作成した。
- 5 整理作業は図面作成・遺物実測及びブトースは和田及び森田が担当し、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。作業に従事した整理作業員は次のとおりである。倉木真由美、吉永和美（以上2名、五十音順、敬称略）。
- 6 空中写真撮影は九州航空株式会社に、保存処理については株式会社吉田生物研究所にそれぞれ委託した。
- 7 本書で使用した第1図「土壌分布図」は宮崎県農政水産部農業振興課昭和57年発行の『土地分類基本調査 妻・高鍋地域』を、第2図「調査箇所と周辺地形および周辺の遺跡」は平成10年高鍋町作成の二千五百分の1図をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を参考にした。
- 9 本書で使用した方位はM.N.と記したものは磁北、G.N.と記したものは座標北を示し、標高は海拔絶対高である。また全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。
- 10 本書で使用した「高鍋城絵図」及び「高鍋城明和六年大地震破損覚書絵図」は、高鍋町歴史総合資料館及び石井政敏氏の許可を得て撮影・掲載した。
- 11 本書の執筆は第Ⅰ章第1節を日高広人、第Ⅱ章を森田が行った。また、第Ⅳ章については鳴門教育大学助教 米延仁志氏に玉稿を賜った。その他の執筆および編集は和田が行った。
- 12 「註」および「引用・参考文献」については、各章末尾に記した。
- 13 出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の組織	
第II章 遺跡周辺の環境	2
第1節 地理的環境	
第2節 考古学的環境	
第3節 歴史的環境	
第III章 調査の記録	8
第1節 調査の概要	
第2節 基本層序	
第3節 高鍋城三ノ丸跡の調査	
第IV章 付編 高鍋城三ノ丸跡出土材の樹種同定と年輪年代法適用の検討	35
第V章 高鍋城三ノ丸跡の変遷～まとめにかえて～	36
第1節 はじめに	
第2節 秋月以前	
第3節 外堀の整備	

挿図目次

第1図 土壌分布図	6	第23図 2号溝状遺構出土遺物【土錘】	17
第2図 調査箇所と周辺地形および周辺の遺跡	7	第24図 3号溝状遺構実測図	17
第3図 高鍋城三ノ丸跡 遺構分布図	9	第25図 3号溝状遺構出土遺物【土師器】	18
第4図 高鍋城三ノ丸跡 土層図	10	第26図 3号溝状遺構出土遺物【陶磁器類】	18
第5図 流路跡土層断面図	11	第27図 3号溝状遺構出土遺物【瓦】	18
第6図 流路跡出土遺物【土師器坏類】	11	第28図 土坑実測図	19
第7図 流路跡出土遺物【土師器小皿類】	12	第29図 土坑出土遺物【土師器】	20
第8図 流路跡出土遺物【土師器底部】	12	第30図 土坑出土遺物【陶磁器類】	20
第9図 流路跡出土遺物【須恵器】	12	第31図 土坑出土遺物【平瓦・軒平瓦・丸瓦】	21
第10図 流路跡出土遺物【輸入陶磁器類】	12	第32図 土坑出土遺物【軒丸瓦・その他】	22
第11図 流路跡出土遺物【瓦質焼成土器】	13	第33図 土坑出土遺物【漆器・下駄】	22
第12図 流路跡出土遺物【国産陶器・その他の遺物】	14	第34図 土坑出土遺物【下駄・把手・台・箱蓋】	23
第13図 1号溝状遺構実測図	14	第35図 1号ピット及び1号ピット出土遺物	24
第14図 1号溝状遺構出土遺物【土師器】	15	第36図 包含層出土の遺物【土師器】	24
第15図 1号溝状遺構出土遺物【須恵器】	15	第37図 包含層出土の遺物【陶磁器類①】	25
第16図 1号溝状遺構出土遺物【輸入陶磁器類】	15	第38図 包含層出土の遺物【陶磁器類②】	26
第17図 1号溝状遺構出土遺物【瓦質焼成土器】	15	第39図 包含層出土の遺物【陶磁器類③】	27
第18図 1号溝状遺構出土遺物【国産陶器】	16	第40図 包含層出土の遺物【瓦】	28
第19図 1号溝状遺構出土遺物【土錘・砥石・火打ち石】	16	第41図 包含層出土の遺物【木製品】	29
第20図 2号溝状遺構実測図	16	第42図 包含層出土の遺物【鉄製品】	29
第21図 2号溝状遺構出土遺物【土師器】	16	第43図 包含層出土の遺物【土錘・燭台・銭貨・鉄滓】	29
第22図 2号溝状遺構出土遺物【青磁】	17		

表 目 次

第1表	高鍋城年表①	4	第5表	高鍋城三ノ丸跡	出土遺物観察表③	32	
第2表	高鍋城年表②	5	第6表	高鍋城三ノ丸跡	出土遺物観察表④	33	
第3表	高鍋城三ノ丸跡	出土遺物観察表①	30	第7表	高鍋城三ノ丸跡	出土遺物観察表⑤	34
第4表	高鍋城三ノ丸跡	出土遺物観察表②	31				

図 版 目 次

卷頭図版1	上段	高鍋城三ノ丸跡遠景（調査地東方向より高鍋城を望む）	
	下段	高鍋城三ノ丸跡遠景（調査地南西方向より蚊口浜方面を望む）	
卷頭図版2	上段	高鍋城三ノ丸跡出土陶磁器	
	下段	高鍋城三ノ丸跡出土木製品	
図版1	高鍋城周辺空中写真（昭和22年米軍撮影）・調査区全景・流路跡土層断面		41
図版2	流路跡出土遺物①（土師器）・流路跡出土遺物②（須恵器）・流路跡出土遺物③（輸入陶磁器）・流路跡出土遺物④（瓦質焼成土器）・流路跡出土遺物⑤（国産陶器）・流路跡出土遺物⑥（その他の遺物）		42
図版3	1号溝状遺構・1号溝状遺構出土遺物①（土師器）・1号溝状遺構出土遺物②（輸入陶磁器）・1号溝状遺構出土遺物③（瓦質焼成土器・国産陶器）・1号溝状遺構出土遺物④（その他の遺物）		43
図版4	調査区全景・2号溝状遺構出土遺物・3号溝状遺構・3号溝状遺構出土遺物①（土師器・陶磁器）・3号溝状遺構出土遺物②（瓦）・3号溝状遺構出土遺物③（石灰岩塊・鉍滓）		44
図版5	土坑出土丸太材・土坑出土遺物①（土師器・陶磁器）・土坑出土木製品 漆器（外）・土坑出土木製品 漆器（内）・土坑出土木製品 下駄（表）・土坑出土木製品 下駄（裏）		45
図版6	土坑出土木製品 把手・土坑出土木製品 台・土坑出土木製品 箱蓋（表）・土坑出土木製品 箱蓋（裏）土坑内出土瓦①・土坑内出土瓦②		46
図版7	包含層出土漆器（表）・包含層出土漆器（内）・包含層出土下駄（表）・包含層出土下駄（裏）・包含層出土匙・包含層出土遺物（華南三彩）		47

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

県立高鍋農業高等学校は高鍋藩秋月家の居城である高鍋城（舞鶴城）の三ノ丸跡内にあり、敷地内には堀跡や大手門跡等が残されている。

県文化財課が平成18年度に実施した事業照会に対し、同校で食品加工実習施設の老朽化に伴う建て替え工事を行う旨、県教育委員会学校政策課から回答があった。事業は平成19年度に基本及び実施設計と旧施設の解体工事、平成20年度に新施設の建設工事が計画されていた。県文化財課では、平成19年度の11月と12月に確認調査を行い、中世から近世にかけての遺構や遺物を確認した。その結果を踏まえ、学校政策課と遺跡の取り扱いについて協議をすすめたが、工事の施工上、計画変更が困難であることから影響を受ける990㎡について記録保存の措置をとることになった。

第 2 節 調査の組織

高鍋城三ノ丸跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

平成20年度 発掘調査および整理作業・報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	福永 展幸	所 長	福永 展幸
副所長	加藤 悟郎	副所長	長友 英詞
総務課長	長友 英詞		
総務担当リーダー	高山 正信	総務担当リーダー	高山 正信
総務担当 主査	古市 篤志	総務担当 主査	古市 篤志
主任主事	矢野 京子	主任主事	矢野 京子
主事	遠目塚尚子	主事	遠目塚尚子
調査第二課長	石川 悦雄	調査第二課長	石川 悦雄
調査第三担当リーダー	福田 泰典	調査第三担当リーダー	福田 泰典
調査第三担当 主査	和田 理啓	調査第三担当 主査	和田 理啓
調査第四担当 主事	森田 利枝	調査第四担当 主事	森田 利枝

事業調整

宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当 主査

日高 広人

調査協力

高鍋町教育委員会

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

地理的条件は、人々が生活する上での絶対条件ともいえる重要なものであるが、現在の開発行為等は新しい地形を生み出し、もともとの地形・土壌の状態を知ることを困難としている。旧地形の情報は、遺跡立地など地域の人々の昔からの土地利用を知る手がかりとなるだけでなく、土地の高低・地盤の安定性など今を生きる私たちにとっても欠かせない情報である。今回の調査では高鍋城城域の地形環境を復元する上での新しい知見が得られた。

高鍋城三ノ丸跡は高鍋町大字上江字旧城内・嶋田に所在し、県立高鍋農業高校敷地と宅地になっている。現在県道24号線と内堀に囲まれた範囲が三ノ丸跡である。調査地点は農業高校正門近くに残る旧大手門より北に約120m、内堀からは西に約10mのところ立地する。標高は現況で約7mを測る。

三ノ丸跡および高鍋町の市街地が位置するのは、小丸川・宮田川とその支流が運んだ土砂の堆積からなる沖積低地である。現在、広範囲に市街化が進んでいる地域であるが、戦前までは、土地が低く低湿な環境にある場所は水田や蓮根畑に、土地が高く水はけの良い場所は集落や畑に利用されるなど、沖積低地内の微地形を反映した土地利用がなされていた。この微地形は洪水などの河川氾濫によってできたもので、約1万年前以降に形成された地層である。沖積平野内の微地形には、自然堤防・後背湿地・旧河床・河跡湖などがある。昭和22年にアメリカ軍によって撮影された空中写真(図版1-1)を見ると、高鍋町内の平原・馬場原・道具小路などは堤防状につながらず島状に発達した微高地と考えられ、島と島との間は宮田川に注ぐ小河川と水田になっている。この島状の微高地は、堤防状であったものをこれらの小河川が削ってできたものなのか、もともと島状に形成されたものなのかは知見を得ない。また、大池久保には小丸川の河跡湖がみえる。

調査の結果、高鍋城三ノ丸跡農業高校地点は小丸川沖積平野のなかでも特に低湿な環境であることが分かった。堆積土は河川作用によってもたらされた粗砂、シルト、粘質土、腐植土で構成されるが、調査区の東西で堆積の様相が異なり、城山側(西側)1/3はシルト・粗砂、外堀側(東側)は粘質土・腐植土・粗砂で低湿であった。ここは地形の変換点であり、外堀側はある時期までは滞水環境にあった可能性がある。

以上を含めて調査地周辺では3箇所の地形変換点が存在すると考えられる。1つは県道24号線から東側に一段下がるところで、調査区付近で約1.5mの比高差がある。これは城山の段丘面から沖積地への変換点と考えられる。2つ目は今回調査区内の変換点で、比高差はないが東西で堆積土壌が異なる。3つ目は外堀から東に一段下がり塩田川流域となる。土壌図(『土地分類基本調査 妻・高鍋 5万分の1』宮崎県1982)によると、塩田川流域の土壌は細粒グライ土壌となっている。この土壌は、「台地周辺の低地か追田に分布し、層序の発達が弱く、常に周辺からの湧水や滞水で地下水位は高く排水は悪い。」という特徴を持つ。調査区はこの分布範囲より1段高い段に位置しているが、外堀側の堆積土壌はこれと類似のものと考えられる。三ノ丸内南側に住む住民の話では、地盤は粘土質で井戸を掘っても金気のある水しか湧かず、昔は生活用水を城内の井戸に汲みに行ったり、用水から笕で引いてきたりしていたそうである。このことから同様な土壌が三ノ丸内に広く分布し、江戸時代初期(1673年)に外堀

が開削される以前は、三ノ丸の東側部分から塩田川流域まで湿地地帯が続いていたと推測される。

また、外堀の開削にあたっては3つ目の地形変換点を利用されていると考えられ、堀とそれを取りまく湿地地帯によって城内を画している。その際、三ノ丸内の低湿な部分がどう処理されたのかについての記録は残っていない。堀を掘削することによって若干乾燥化することがあったのかもしれないが、調査で確認した堆積土壌から判断して、堀と連続する湿地として残った可能性が高い。そして、遺構の検出状況および出土遺物の様相から18世紀後半には埋め立てられ、生活域として利用されていたと考えられる。

第2節 考古学的環境

高鍋城と高鍋城下町に関わる発掘調査は少なく、確認できる過去3地点の調査成果を記載する。

1 高鍋城跡詰の丸三層櫓確認調査（高鍋町教育委員会 平成2年度実施）

慶長14年（1609）に建てられた三層櫓の正確な位置及び規模等を確認することを目的として実施された。発掘調査は詰の丸の郭内に2箇所の特レンチを設定して行われた。調査の結果、礎石、現存する石垣に並行する石列、石垣の裏込め、瓦溜が確認されているが、三層櫓に直接関連すると推測される遺構の確認には至っていない。また調査区の堆積土は、砂を主とする層と粘質のある土の層の交互堆積で、版築の状況が報告されている。出土遺物は軒丸瓦、軒平瓦、釘、鉄鏃、瓦製土錘、陶磁器が出土している。

2 高鍋城跡嶋田地区地点（宮崎県埋蔵文化財センター 平成7年度実施）

嶋田地区災害関連緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴い実施された。調査対象地内の平坦面で6箇所の特レンチ発掘を行っている。調査の結果、中世段階で二時期の遺構構築面が確認されている。I期：段落ち状遺構、小穴、通路状遺構、II期：石組み列、土塁状遺構が検出されたが、調査者はこの二時期に大きな差はないと判断している。このなかで土塁状遺構については、土塁下部に土止めの石列をもつものと考察されており、同様な遺構が同じ新納院に属する木城町の高城跡で検出例があると報告されている。出土遺物は15世紀から16世紀の青磁、白磁、染付といった貿易陶磁の他に、備前焼、土師器、瓦質土器、瓦が出土している。なかでも16世紀の所産が多い。

3 高鍋城下遺跡（宮崎県教育委員会 平成4年度）

小規模改良事業一級河川小丸川水系塩田川改修工事に伴い実施された。調査地点は塩田川右岸端、高鍋農業高校敷地の脇になる。調査の結果、遺構の検出はなかったものの、鉄分の沈着層とグライ化層の存在から水田であったと報告されている。

第3節 歴史的環境

高鍋城は、もとは財部城と称し、築城の時期は詳らかではないが、同地の領有関係から財部土持氏による築城と考えられている。文献には、応安5年（1372）財部城主として土持玄蕃允田部直綱が財部大明神を崇敬した内容が初出である。また、「高鍋城」の名は天正15年（1587）豊臣秀吉の朱印状にあるのがはじめて、高鍋藩第三代藩主秋月種信は延宝元年（1673）、正式に「財部」から「高鍋」に改称した。

下表にあげた事項は、江戸時代以前の高鍋城の領有関係をしめすものと、江戸時代に入ってから城郭施設および明倫堂に関するものである。

第1表 高鍋城年表①

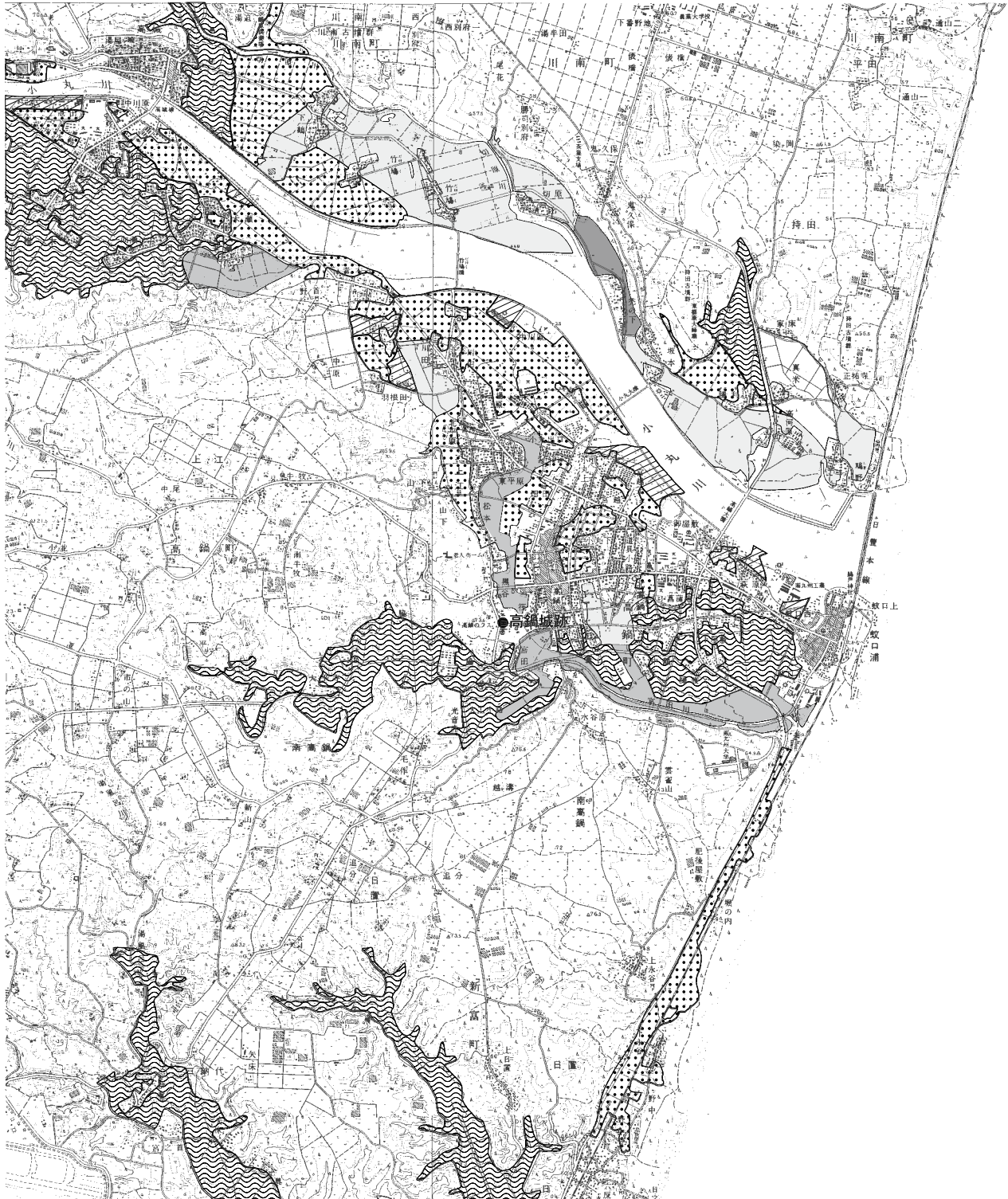
和暦	西暦	事 項	時代
応安5年	1372	土持玄蕃允田部直綱 応安五年財部城主財部大明神崇敬（『財部大明神縁起』）	
長禄元年	1457	財部土持氏が伊東氏に降ったため、伊東氏家臣である落合民部少輔が財部の地頭となる（「三カ国家人ノ御教書ヲ賜ル事」『日向記』）	
文明6年	1474	薩摩方の城として財部が載る（「文明六年三州廻々領主記」『都城島津家文書』）	
天文2年	1533	財部城主落合民部少輔（「武蔵守祐武殺害事」『日向記』）	
永禄11年	1568	財部城主落合民部少輔若名藤九郎、子モ藤九郎ト云（「分国中城主揃事」『日向記』）	
天正5年	1577	財部城主落合藤九郎（「依福永逆心没落事」『日向記』）	
天正6年	1578	財部地頭、鎌田筑州（政心）（『上井覚兼日記』）	
天正11年	1583	鎌田政心、財部地頭（『上井覚兼日記』）	
天正14年	1586	財部之内城川上三河守（「川上久辰耳川日記」『都城島津家文書』）	
天正15年	1587	豊臣秀吉、秋月種長に「日向国高鍋城」を知行（『豊臣秀吉朱印状』）	初代種長
天正17年	1581	種長、入城（『本藩実録』）	
慶長5年	1600	関ヶ原の戦い 十月、城の櫓普請（『本藩実録』）	
慶長12年	1607	正月、野首堀切工事（『本藩実録』）	
慶長14年	1609	詰ノ丸三層櫓普請（『本藩実録』）	
慶長19年	1614	大阪冬の陣	二代種春
元和元年	1615	大阪夏の陣	
寛文10年	1670	杉ノ本御門石壁普請、十月成就（『本藩実録』）	三代種信
延宝元年	1673	正月、高鍋城普請始まる（『本藩実録』） 財部から高鍋に改称（『本藩実録』）	
延宝2年	1674	御城大手口二階御門普請（『本藩実録』）	
延宝3年	1675	島田、見野崎（蓑崎）の櫓門完成（『本藩実録』）	
延宝4年	1676	本丸普請（『本藩実録』）	
延宝6年	1678	本丸「二階門」（矢倉門）普請（『本藩実録』）	
元禄11年	1698	大地震により大手口東の石垣崩れ、城内も所々破損する（『本藩実録』）	四代種政
元禄12年	1699	城修復完成し、矢倉門を長峯門に、杉本門を岩坂門に改称する（『本藩実録』）	四代種政







第2表 高鍋城年表②

和暦	西暦	事 項	時代
宝永4年	1707	大地震で城ならびに家中居宅大破（『本藩実録』）	五代種弘
享保7年	1722	廉（角）の屋敷に学問所を置く（後の明倫堂）（『高鍋藩史話』）	
享保19年	1734	大風雨により城山崩れ諸役所等倒壊（『本藩実録』）	
明和6年	1769	大地震により高鍋城大破損（『続本藩実録』）	七代種茂
安永7年	1778	学校（明倫堂）開講（『続本藩実録』） 大手橋の地付きの部分に石をつくる（『続本藩実録』）	
安永8年	1779	大手橋出来、御堀石垣足軽加勢により完成（『続本藩実録』）	八代種徳
天明6年	1786	大風雨により城内大破損（『続本藩実録』）	
寛政12年	1800	廉の屋敷に米倉一棟造営（『続本藩実録』）	
弘化元年	1844	明倫堂に医学館を付設する（『続本藩実録』）	十代種殷
嘉永4年	1851	菱根取り、土手修復の名目で城堀の泥さらえを行う（『続本藩実録』）	
嘉永6年	1853	学校寄宿寮を設ける（『続本藩実録』）	
慶応3年	1867	明倫堂新校舎に移転する（『高鍋藩史話』） 大政奉還	
明治2年	1869	版籍奉還	
明治4年	1871	廃藩置県	

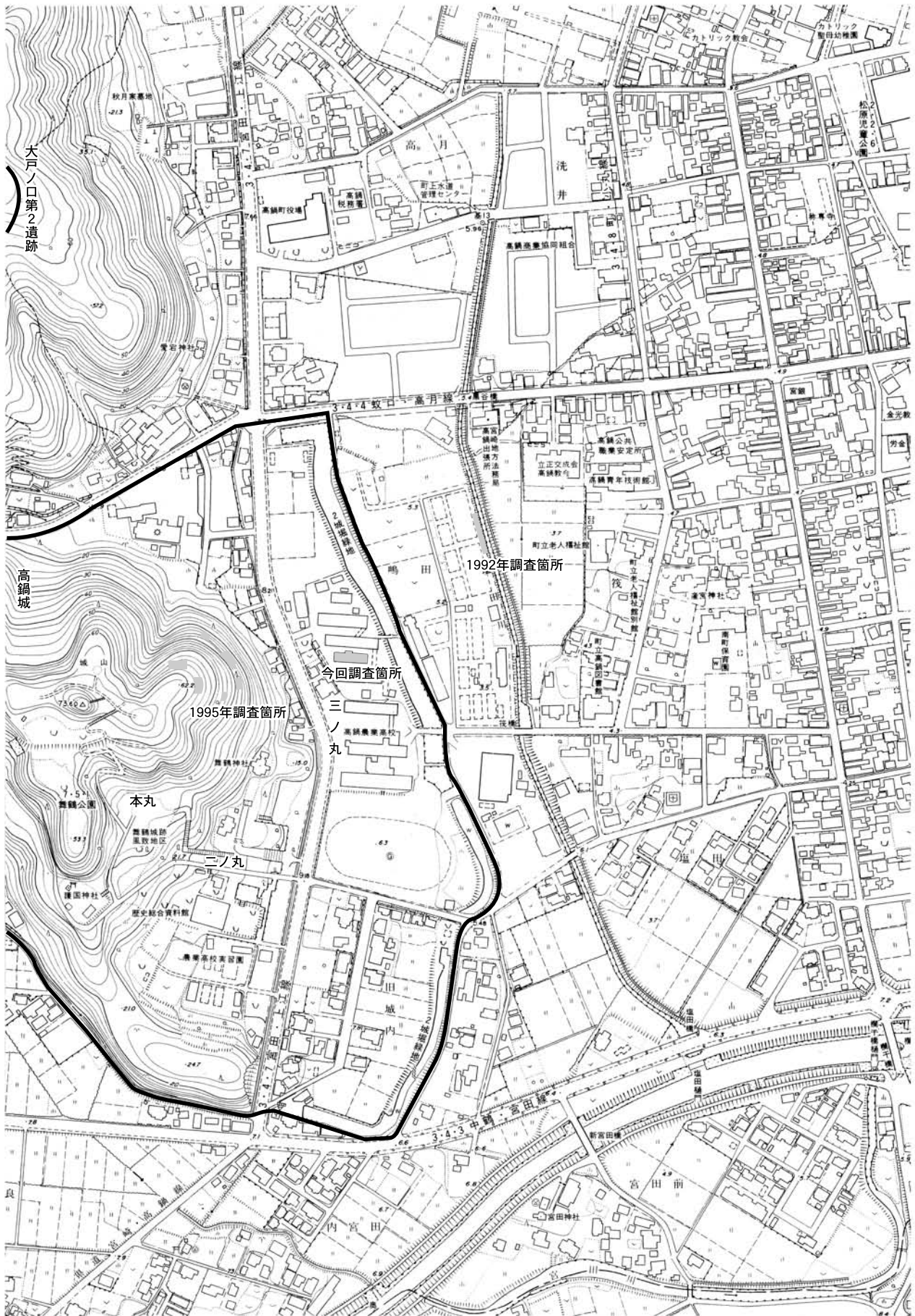
【参考文献】

- 山本 格編1991『老瀬坂上第2遺跡 高鍋城跡』高鍋町文化財調査報告書第6集
- 長友郁子1994「高鍋城下遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第37集
- 吉本正典1997『高鍋城跡（嶋田地区）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第5集
- 宮崎県農政水産部農業振興課1982『土地分類基本調査 妻・高鍋地域』
- 宮崎県教育委員会1999「高鍋城〔舞鶴城〕」『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ詳説編
- 宮崎県1990『宮崎県史』史料編 中世1
- 宮崎県1999『宮崎県史叢書』日向記
- 宮崎県立図書館1975『宮崎県史料』第1巻 高鍋藩 本藩実録
- 宮崎県立図書館1975『宮崎県史料』第2巻 高鍋藩 拾遺本藩実録
- 宮崎県立図書館1975『宮崎県史料』第3巻 高鍋藩 続本藩実録（上）
- 宮崎県立図書館1975『宮崎県史料』第4巻 高鍋藩 続本藩実録（下）
- 東京大学史料編纂所1954『大日本古記録』上井覚兼日記 上
- 東京大学史料編纂所1955『大日本古記録』上井覚兼日記 中
- 東京大学史料編纂所1957『大日本古記録』上井覚兼日記 下
- 安田尚義1968『高鍋藩史話』高鍋町



- | | | |
|---|----------|-----------------------------------|
|  | 褐色低地土壤 | 層序の発達は弱く、地下水位は一般に低い。 |
|  | 灰色低地土壤 | 層序の発達は比較的明瞭である。地下水位は低く乾田である。 |
|  | 細粒灰色低地土壤 | 層序の発達は比較的明瞭である。地下水位は低く排水の良い乾田である。 |
|  | 粗粒灰色低地土壤 | 地下水位は低く排水の良い乾田である。下層は礫質、砂礫質である。 |
|  | 細粒グライ土壤 | 層序の発達は弱い。地下水位は高く排水は悪い。排水が悪く湿田である。 |
|  | グライ土壤 | 細粒グライ土壤に類似する。河川流域で周辺より低地に分布する。 |

第1図 土壤分布図 (1 : 50000 『土地分類基本調査 妻・高鍋地域』を再トレース)



第2図 調査箇所と周辺地形および周辺の遺跡 (1:5000)

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 調査の概要

高鍋城三ノ丸跡の発掘調査は平成20年5月12日から7月18日（現地調査30日）にかけて行われた。

調査は、当初、確認調査で検出された石列の把握を優先して表土の掘削を行った。その結果、石列はコンクリート基礎の下部構造であり、旧校舎に伴うものであることが判明したため、近世以前の遺構を確認するため、さらに掘り下げを行った。

遺構の検出面は、調査区の東側約2/3が近世期以前に形成されたと考えられる湿地帯の堆積物で、残り1/3の砂堆上から中世の流路と溝跡、近世の溝跡、土坑などが確認できた。出土遺物は、中世では土師器、須恵器のほか龍泉窯系の青磁などが、近世については陶磁器類の他に下駄や匙などの木製品が出土した。

また、土層観察から、高鍋農業高校開校以前に2回以上の造成が行われていることが確認された。

現在の濠に平行する形でのびる旧濠の汀線と考えられる段落ちを埋めて造成されており、18世紀と19世紀あたりに三ノ丸の敷地を拡張していることが伺える。

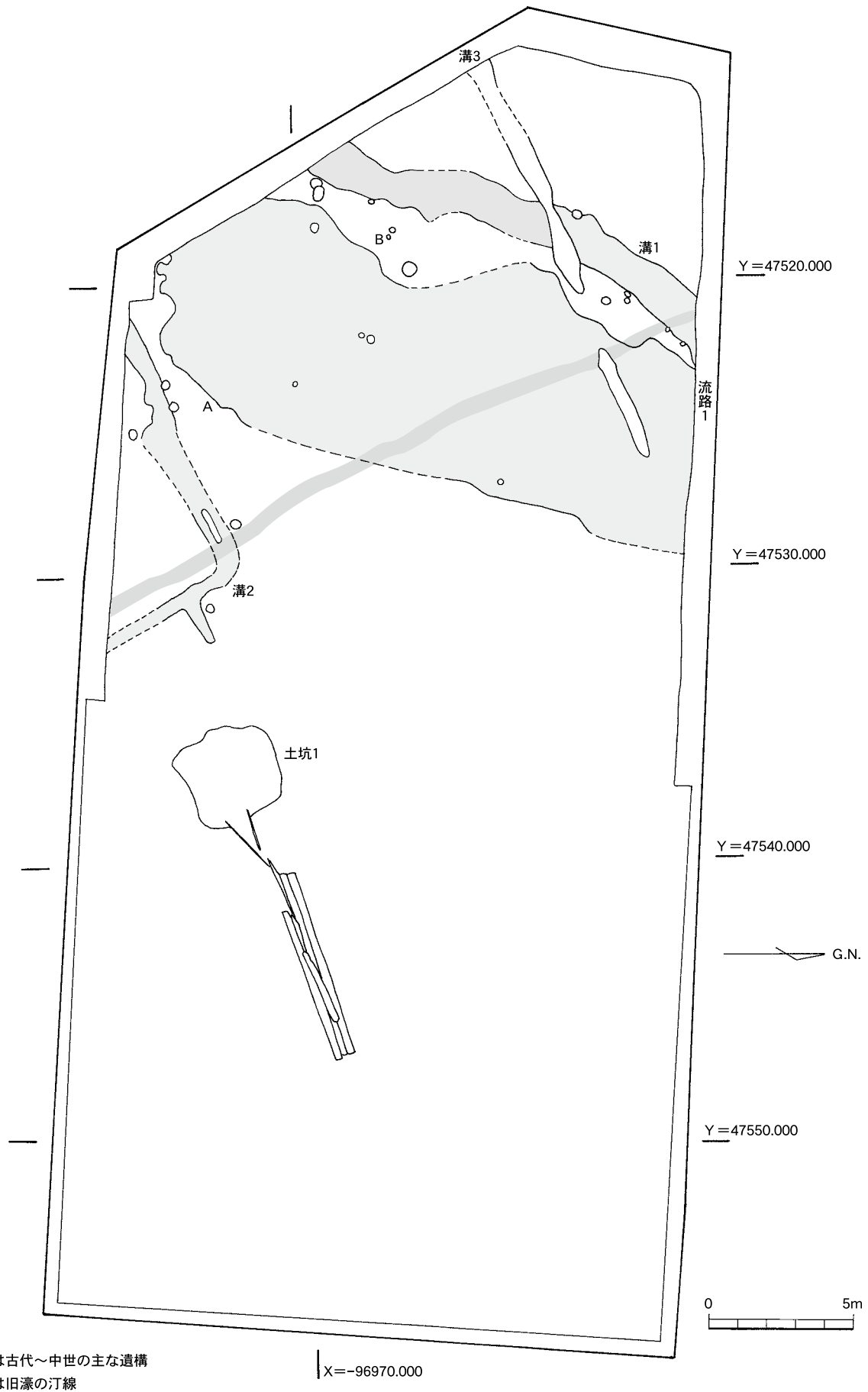
第2節 基本層序【第4図】

今回の調査区は高鍋農業高校の敷地内で、同校の開校以来、施設の増改築等による造成、掘削が何度も行われていたようであり、建物基礎や配管等による攪乱が各所にみられた。

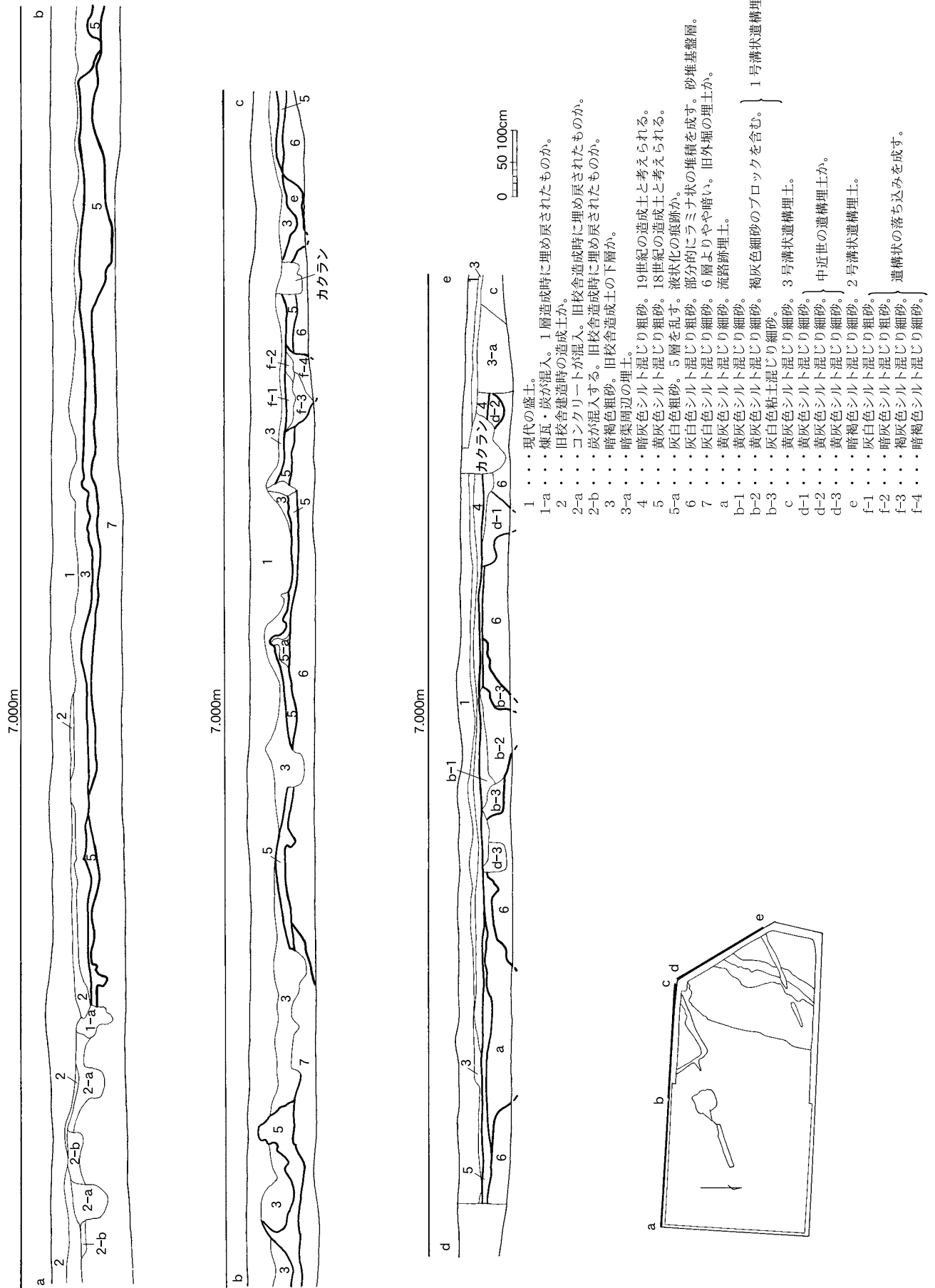
近世に行われたと考えられる造成に関わる堆積は、確実なものは2面（第4図4層及び5層）確認できており、各層中からの出土遺物から、上層は19世紀、下層は18世紀代の造成である可能性が高い。

基盤となる層は、粗砂～シルト質の堆積物である。調査区南壁の西から1/3程度の部分でこの基盤層が分断されている。平面調査の結果とあわせてみると、初期の濠の汀線であると考えられる。汀線より東側は、粗砂～シルトが堆積しており、その堆積状況から湿地状を呈していたと考えられる。石積みなどは確認できておらず、後世に描かれた古図やわずか1ヶ月で濠の掘削を行ったという記録の裏付けになるかもしれない。濠内の堆積物からは、下層造成土とほぼ同時期の遺物が出土しており、少なくともこの時期までは汀線部分まで濠であったと考えたい。

基盤層は前述の造成面により削閉され、その上層の自然堆積層は判然としない。基盤層上面から約1.3mほど下層にアカホヤ火山灰の堆積が確認されており、砂堆の形成時期が縄文前期を遡らないことが分かった。



第3図 高鍋城三ノ丸跡 遺構分布図 (1 : 200)



第4図 高鍋城三ノ丸跡 土層図 (1:80)

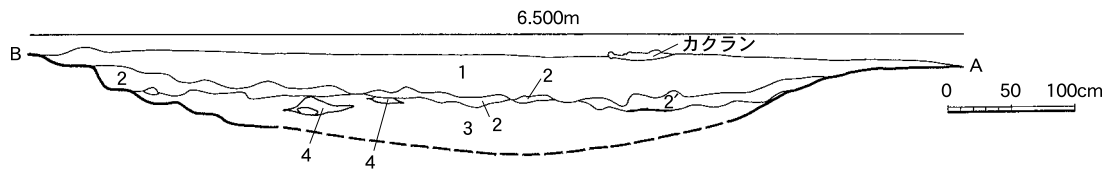
第3節 高鍋城三ノ丸跡の調査

1 中世の遺構と出土遺物

(1) 流路跡【第3図】

調査区の西側を西南から北北東に横切る幅約6m～8mの流路跡である。埋土は、シルト質土壤で底面近くにラミナ状の堆積が確認でき、一時期少ないとはいえ流水があったことを伺わせる。

埋土中には極小の礫片を多数含んでおり、西側丘陵部分を源とする流路と考えられる。最終埋土中に、土師器片、輸入陶磁片、瓦質の土器（第11図）片、古瀬戸の瓶子片などが出土しており、これらから14世紀頃には埋没していたと考えられる。



- 1・・・黒褐色シルト混じり粗砂。層底面近くに3～5cm程度の灰白色シルトのブロックを含む。
- 2・・・暗灰色シルト混じり細砂。灰白色ブロックを20%程含む。
- 2'・・・灰白色シルト混じり細砂。暗灰色シルトを3%程含む。層底面に炭化物が沈着する。
- 3・・・暗灰色粗砂混じりシルト。径3cm～10cm程度の灰白色シルトを5%程含む。
- 4・・・暗緑灰色粗砂と青灰色シルトの互層。ラミナ状を成す。

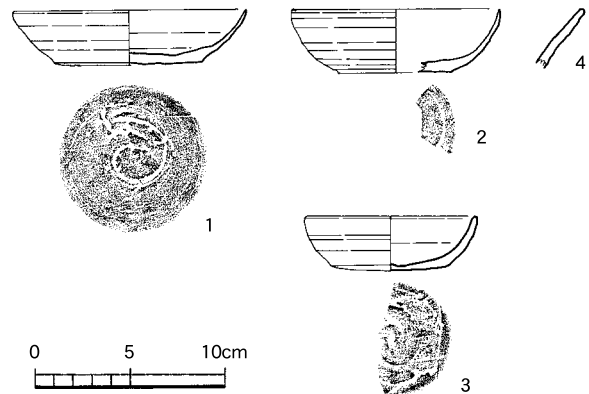
第5図 流路跡土層断面図（1：60）

・出土遺物

a. 土師器【第6図～第8図】

流路内からは、土師器の坏と多量の土師器皿が出土している。大部分がローリングを受けた小片であり図化は困難であった。また、一部の土師器には、煤等が付着しており、灯明皿が相当数あったと予想される。

1～4は土師器の坏類である。1は復元口縁径12.5cm、底部径7.9cm、器高は2.9cmを計る。底部から口縁部にかけて若干内湾気味に立ち上がる。底部はヘラ状工具により切り離されている。2は復元口縁径12.0cm、復元底部径7.0cm、器高3.4cmを計り、底部はヘラ状工具により切り離されている。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。3は復元口縁径9.0cm、底部径6.3cm、器高2.9cmを計り、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。底部はヘラ状工具により切り離されている。4は口縁部の破片であるが、小片のため



第6図 流路跡出土遺物【土師器坏類】（1：4）

径の復元はできなかった。

5～9は土師器の小皿である。5は口縁径7.8cm、底部径6.4cm、器高1.4cmを計る。ほぼ完形でありヘラ状工具で切り離されている。6は復元口縁径8.1cm、復元底部径6.6cm、器高1.5cmを計る。底部はヘラ状工具で切り離している。7は復元口縁径8.8cm、復元底部径6.8cm、器高1.8cmを計り底部はヘラ状工具で切り離されている。8は復元口縁径8.1cm、復元底部径7.1cm、器高1.4cmでヘラ状工具で切り離されている。9は復元口縁径7.5cmで底部近くまで残存している。底部はヘラ切り離しである。

10～13は土師器類の底部である。坏類もしくは、小皿の底部であると考えられる。10、11は風化が激しく底部の切り離し技法は判然としないが、残存部の状況からヘラ状工具で切り離されていたものと考えられる。底部の大きさから坏であった可能性が高い。12、13はやや小ぶりの底部で、小皿の底部と考えられる。ヘラ状工具により切り離されている。

b. 須恵器【第9図】

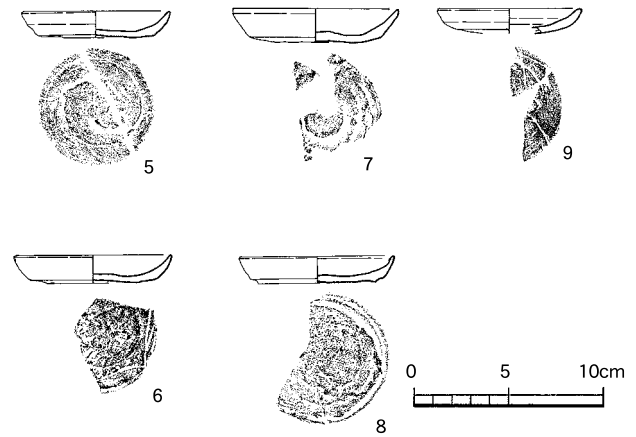
流路内からは若干の中世須恵器が出土している。

14～16は東播系須恵器の捏鉢の破片である。14は口縁部から体部の破片で復元口縁径28.0cmを計る。体部の下部から縦方向のナデが施されている。15は底部付近、16は口縁部の一部である。

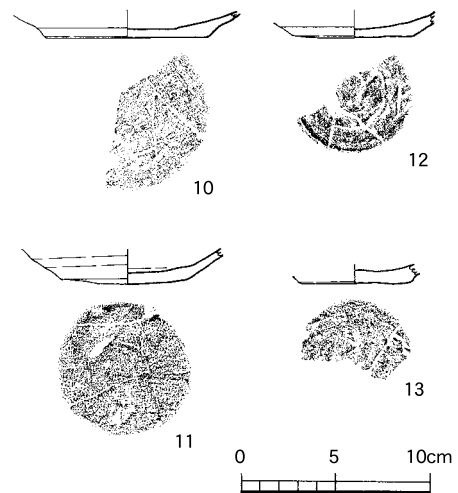
c. 輸入磁器類【第10図】

流路内から、白磁及び青磁が出土している。

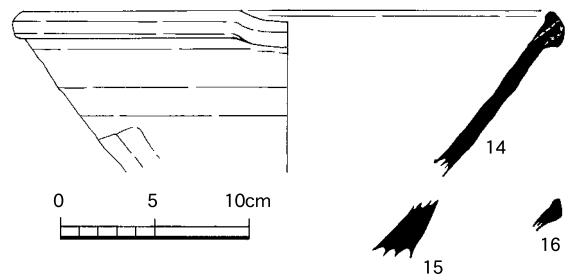
17は龍泉窯系の青磁である。内面及び見込み部に劃花文が施されている。横田・森田分類（横田賢次郎・森田勉1978）の碗I 4a類に当たるか。18は白磁の底部で、見込部を残し体部より上を打ち欠いて瓦玉としている。見込部に段が確認でき、横田・森田分類の白磁皿IX 1c類にあたる。その他輸入陶磁器としては、鎬蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗の破片（図版2-3・a）が出土している。



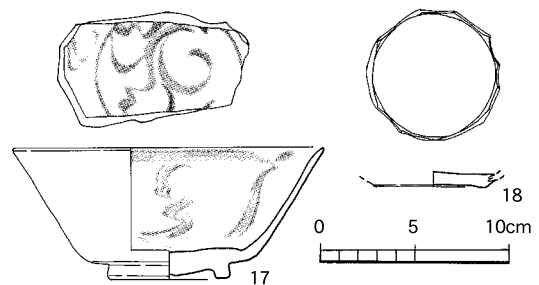
第7図 流路跡出土遺物【土師器小皿類】（1：4）



第8図 流路跡出土遺物【土師器底部】（1：4）



第9図 流路跡出土遺物【須恵器】（1：4）



第10図 流路跡出土遺物【輸入陶磁器類】（1：4）

d. 瓦質焼成土器【第11図】

流路内から「瓦質焼成土器」ともいふべき焼き締めが甘い、表面に炭素の吸着した土器が出土している。器面調整は、格子のタタキ目が入るものが大半で須恵器に準ずるようである。

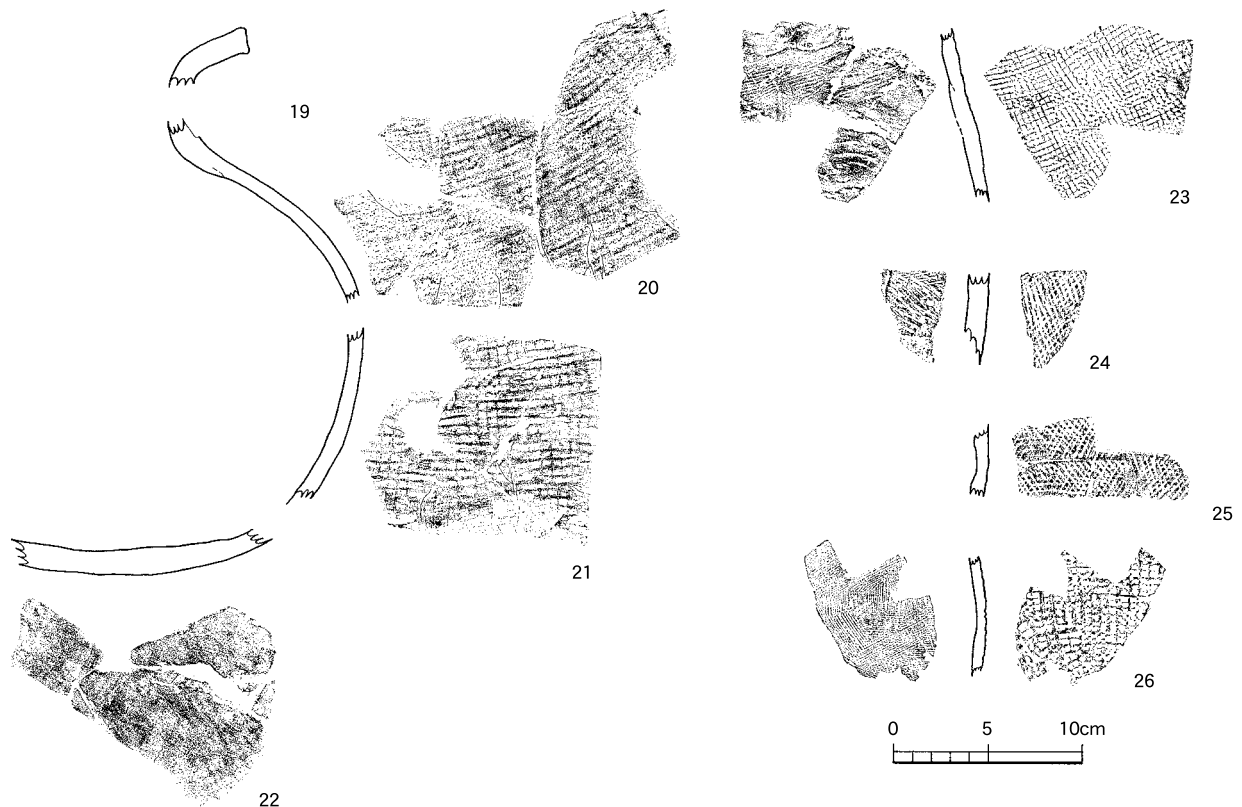
19～26は甕の破片である。19は口縁部の破片で、内外面ともに炭素が付着している。20～22は甕の頸部から底部にかけての破片である。胎土の状況、色調、出土位置などから同一個体と判断した。表面は格子目のタタキ板によって調整されている。19については、胎土や色調が20～22と異なるが出土位置は近接していた。

23は19～22に比較すると、薄手で焼き締めの状態が良い。表面には格子のタタキ目が残る。24・25はやや厚手で焼き締めも甘い。また、表面の炭素の吸着も弱い。表面は平行のタタキ目が斜めに交差し、菱形の格子目を形成している。26は焼き締めの状態は良好であるが、炭素の吸着がほとんど見られない。色調は黄橙色で一見土師器のようである。外面は格子のタタキ目残り、内面はハケメ調整でアテ具痕を消している。ハケメの入り方から底部付近の可能性が高い。

これらの瓦質焼成土器は表面の肉眼観察からは、いわゆる瓦器塚のように炭素の吸着状態は良くないようである。菅原正明によると、河内や摂津の初期の瓦器塚では高温でいぶし焼きを行う技術が未熟であった結果、炭素の吸着が悪いものがあるようである⁽¹⁾。同様に、地方において還元煙焼成を行う場合、いぶしの技術が未熟な場合があったのかもしれない。

e. 国産陶器【第12図27】

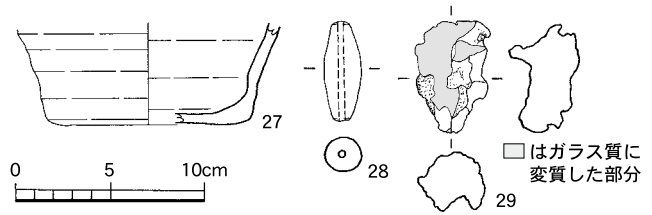
古瀬戸瓶子の底部と考えられる破片が出土している。外面に灰釉が施されている。(図版2-5)



第11図 流路跡出土遺物【瓦質焼成土器】 (1:4)

f. その他の遺物【第12図】

28は土錘である。全長5.3cmを計り、重量は17g重である。29は鉄滓である。表面は一部ガラス質に変質しており、表面の発泡もみられる。重量は50g重であり、メタル分はあまり多く含まないと考えられる。その他、鍛冶関連の遺物として鞆の羽口の破片（図版2-6・b）が出土している。



第12図 流路跡出土遺物【国産陶器・その他の遺物】（1：4）

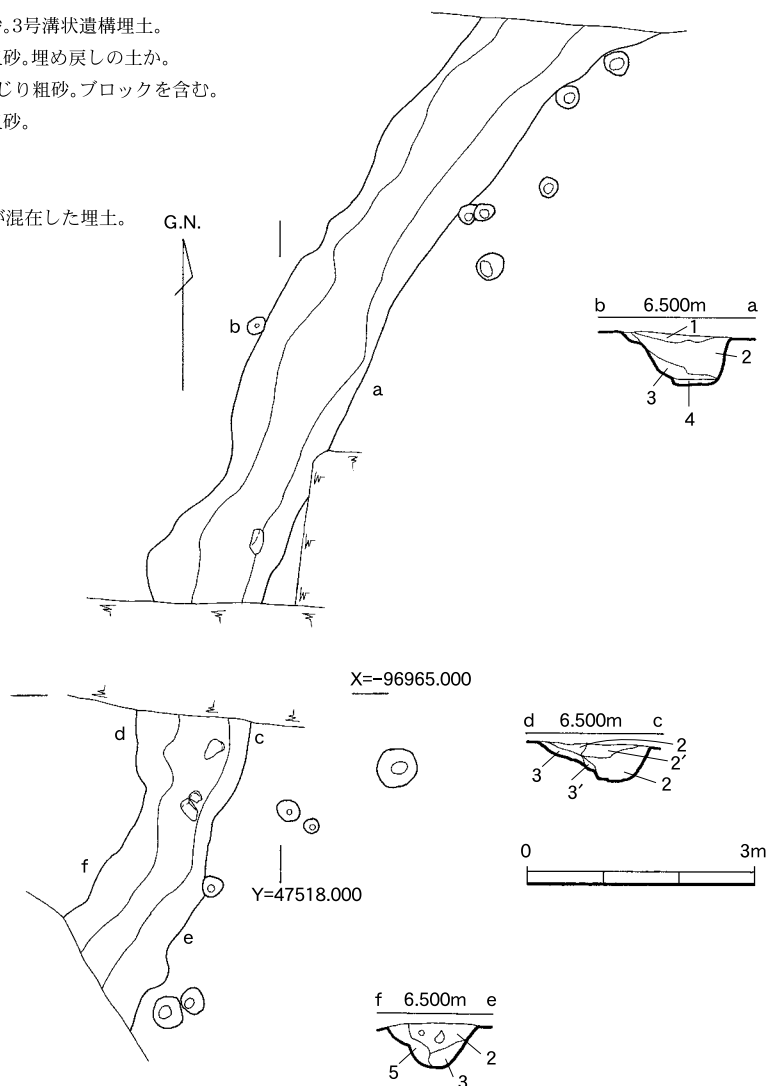
(2) 1号溝状遺構【第13図】

調査区を南西から北北東に横切る溝である。幅約1.0m～1.5mを測り、検出面からの深さは50cm～70cmである。土層観察から、少なくとも1回、掘り直されていることが分かる。

溝の両岸には、径約20cm～30cmの小ピットが不規則に確認されている。

最終埋土には拳大～人頭大の礫が混入しており、廃棄時に埋め戻されたものと考えられる。溝内からは土師器、陶磁器類等が出土している。出土遺物から、14～15世紀には廃棄されていたと考えられる。

- 1・・・灰色シルト混じり粗砂。3号溝状遺構埋土。
- 2・・・緑灰色シルト混じり粗砂。埋め戻しの土か。
- 2'・・・2層に灰白色シルト混じり粗砂。ブロックを含む。
- 3・・・灰白色シルト混じり粗砂。
- 3'・・・灰白色粗砂。
- 4・・・黄灰色シルト質細砂。
- 5・・・2層と3層のブロックが混在した埋土。



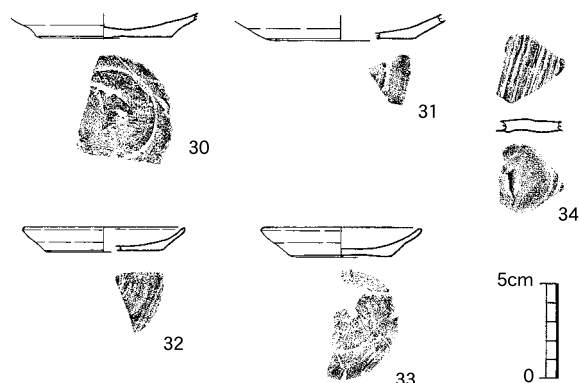
第13図 1号溝状遺構実測図（1：100）

・出土遺物

a. 土師器【第14図】

30～34は1号溝状遺構出土の土師器である。

30と31は土師器の底部である。底部周辺のみ破片であり器形は判然としない。32と33は土師器の小皿である。32は復元口縁径8.5cm、復元底部径6.3cm、33は復元口縁径8.3cm、復元底部径5.5cmを計る。34は土師器の底部付近の破片である。見込部にハケメ状の工具痕が確認できる。底部の切り離しは全てヘラ状工具で行われている。



第14図 1号溝状遺構出土遺物【土師器】(1:4)

b. 須恵器【第15図】

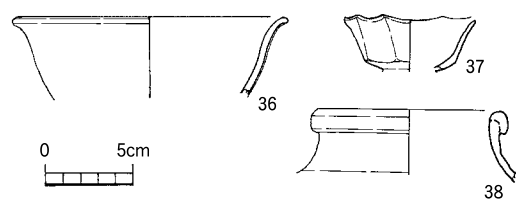
35は須恵器の甕の破片である。外面には自然釉がかかり平行のタタキ目痕が、内面には同心円のアテ具痕が残る。胎土、焼成、調整の状況から、古代の須恵器が混入したものと考えたい。



第15図 1号溝状遺構出土遺物【須恵器】(1:4)

c. 輸入陶磁器類【第16図】

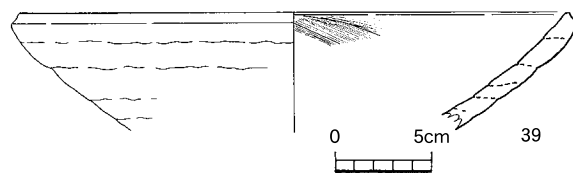
36は青磁端反碗である。復元口縁径15.4cmを計る青磁釉が厚くかけられており、破断面で確認すると、厚い部分では1mmを超える箇所もある。青磁釉は淡い緑色をしている。37は白磁の八角鉢である。口縁部の幅は7.5cmを計り乳白色の釉が全面にかかる。38は玉縁状の口縁をもち褐釉が施されている陶器の口縁部である。残存部下端部から屈曲しており、ここから肩部を形成すると考えられる。復元口縁径は10.6cmを計る。後世の混入の可能性も大きいですが、形状、釉の色調等から14世紀頃のものと考えたい。



第16図 1号溝状遺構出土遺物【輸入陶磁器類】(1:4)

d. 瓦質焼成土器【第17図】

39は東播系須恵器を模倣したと考えられる捏鉢である。形状は東播系須恵器に似るが、焼き締めが非常に甘い。器表の剥落が激しく表面の調整は判然としないが、部分的に炭素が吸着した箇所が確認できたため、「瓦質焼成土器」として扱った。

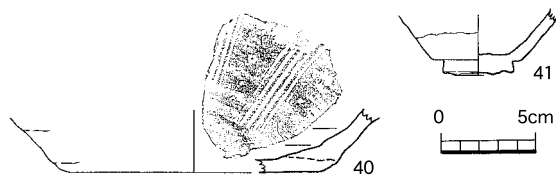


第17図 1号溝状遺構出土遺物【瓦質焼成土器】(1:4)

e. 国産陶器【第18図】

40は備前播鉢の底部である。復元底部径13.0cmを計る。内面は使用により摩耗が激しい。断面観察からは、内芯が黄橙色と明褐色の胎土がマール状に混ざり合う状態を呈していることが分かる。播目は、

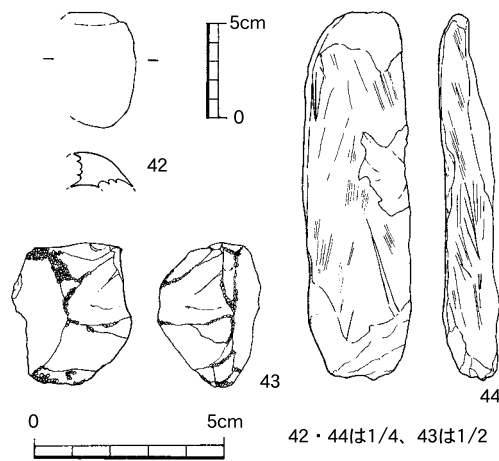
幅1.9cm内に5本の条線を有するものが一つの単位となるようである。41は天目型の碗である。胎土の状態から古瀬戸と考えられる。内面は全面に褐釉が施され、外面は底部から約2cm上方まで施釉されている。



第18図 1号溝状遺構出土遺物【国産陶器】（1：4）

f. その他の遺物【第19図】

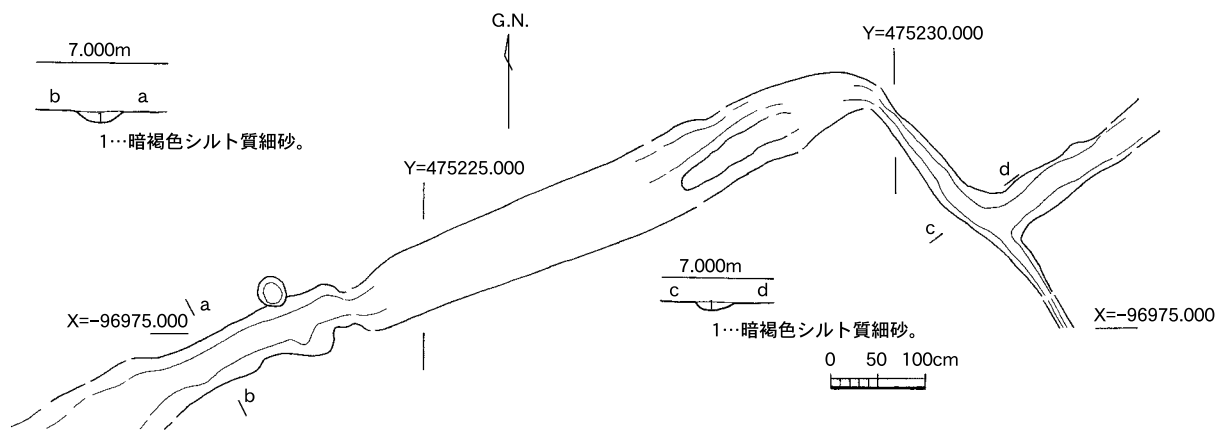
42は土錘である。全体の1/4程度が出土しており、重さ43gを計る。43は火打ち石である。表面は乳白色をしており、石材はチャートと考えられる。石の稜がよく敲打され潰れているのが観察できる。火付きが悪くなりうち捨てられたものであろうか。44は砥石である。石材は砂岩で2面に研面が確認できる。鋭く深い傷が確認でき、金属製の刃物を研いだものと考えられる。その他、遺構内からモモの種子と考えられるもの（図版3-5・c）が出土している。



第19図 1号溝状遺構出土遺物【土錘・砥石・火打ち石】

(3) 2号溝状遺構【第20図】

調査区の南西壁を方形に囲むように巡る溝である。検出面での幅16cm～84cm、深さ10cm～20cm程度を測る。濠汀線とほぼ同一主軸をもち、形状からは、何らかの施設の方形区画である可能性も考えられる。遺構内からは土師器片のほか、龍泉窯系の青磁輪花皿片が出土している。時期を比定する遺物に乏しいが、出土した輪花皿などから、15～16世紀のものと推定した。

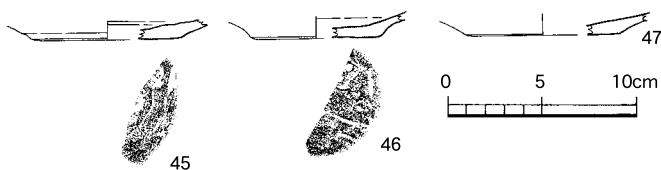


第20図 2号溝状遺構実測図（1：80）

・出土遺物

a. 土師器【第21図】

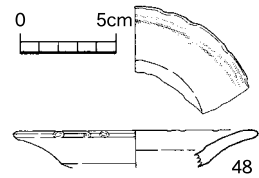
45～47は土師器である。いずれも底部付近のみの破片で全体の形状はよく分らないが、坏もしくは小皿の底部であると考えられる。45と46はヘラ状工具により切り離されている。47は摩耗が激しく、底部切り離し方法は判然としない。



第21図 2号溝状遺構出土遺物【土師器】（1：4）

b. 青磁【第22図】

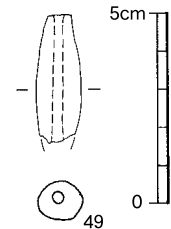
48は青磁の輪花皿である。釉は淡い緑色に発色しており、口縁部付近に2～3条に波状の陥入が確認できる。



第22図 2号溝状遺構出土遺物【青磁】(1:4)

d. 土錘【第23図】

49は土錘である。一部を欠損しており、現存長3.4cm、最大幅1.2cmを計る。

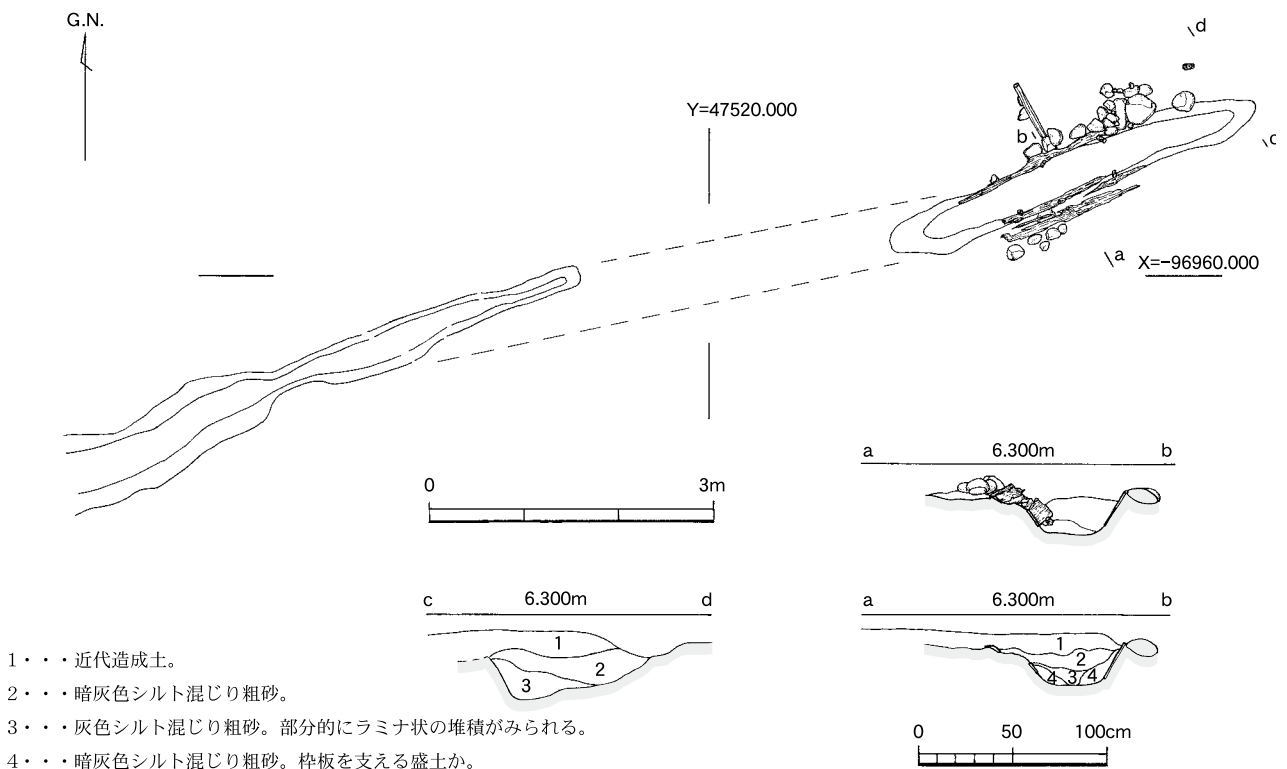


第23図 2号溝状遺構出土遺物【土錘】(1:2)

2 近世の遺構と出土遺物

(1) 3号溝状遺構【第24図】

調査区の西側から西北西に横切る溝である。溝の一部で、杭と板材により護岸している様子が確認できた。幅約50～85cm程度、検出面からの深さ10～18cm程度で、遺構内からは17世紀頃の陶磁器片が出土している。埋土にはラミナ状の堆積が確認でき、水流があったことを伺わせる。濠汀線にほぼ直交する方向に掘削されており、出土遺物とあわせて考えると城郭や屋敷地に関連する遺構の可能性が高い。



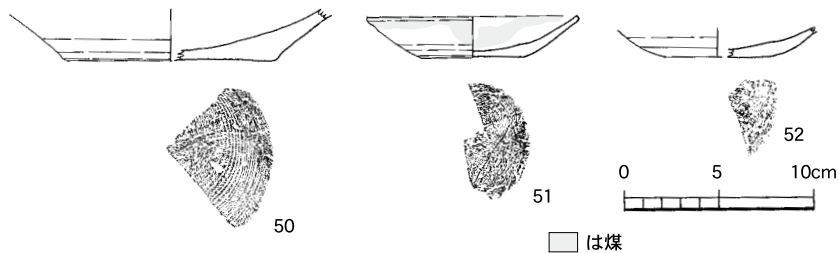
第24図 3号溝状遺構実測図(平面図1:80 土層断面・立面図1:40)

・出土遺物

a. 土師器【第25図】

50は土師器の底部である。復元底部径11.3cmとかなり大型である。底部以外の残存部位が少なく、器形は断定できないが全体の形状から坏であると判断した。底部は糸で切り離されており、板状の圧痕が確認できる。51は土師器の小皿である。復元口縁径は11.1cmを計り、内外面ともに多量の煤が付着して

いる。灯明皿として使用された者と考えられる。底部はヘラ状工具により切り離されたのちにナデを施されている。また、底部にも方形に煤が付着している。52は土師器の底部付近の破片である。全体に摩耗している

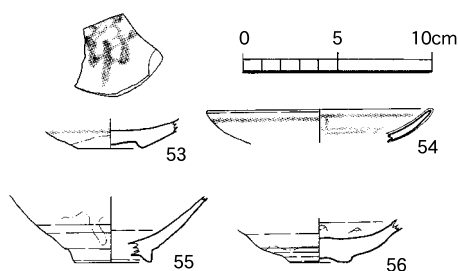


第25図 3号溝状遺構出土遺物【土師器】(1:4)

が、底部はヘラ状工具により切り離されているようである。小皿、もしくは坏であると考えられるが、残存部位が少なく判断は困難である。

b. 陶磁器類【第26図】

遺構内からは数点の陶磁器類が出土している。53・54は青花の破片である。53は碁笥底で見込部分に「寿」を意匠化したものが描かれている。54は口縁部付近の破片である。口縁部には内外面ともに1条の圈線が、見込部周辺には2条の圈線が巡る。釉が厚い部分では1mm近い厚さで施されている。



第26図 3号溝状遺構出土遺物【陶磁器類】(1:4)

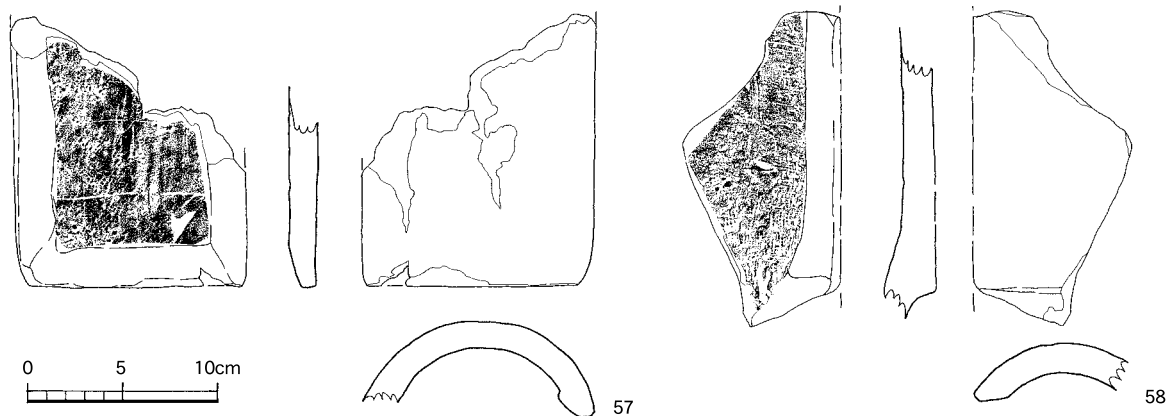
55は天目型の碗である。内外面ともに鉄釉が施される。56は皿の底部付近と考えられる。見込部分には胎土目積みの痕跡が確認できる。見込と体部の境に段が形成され、内外面ともに灰釉が施される。底部は糸で切り離されたのちに高台を削り出している。

c. 瓦【第27図】

57と58は丸瓦である。57は燻しが甘く表面は灰色である。内面に布目の痕跡、外面にヘラ状工具でナデたあとが確認できる。58は57と比較して断面の湾曲が強く、燻しも良い。57と同様に内面に布目の痕跡が確認できる。

d. その他の遺物

その他、遺構内からは鉾滓、石灰岩塊(図版4-6)などが出土している。

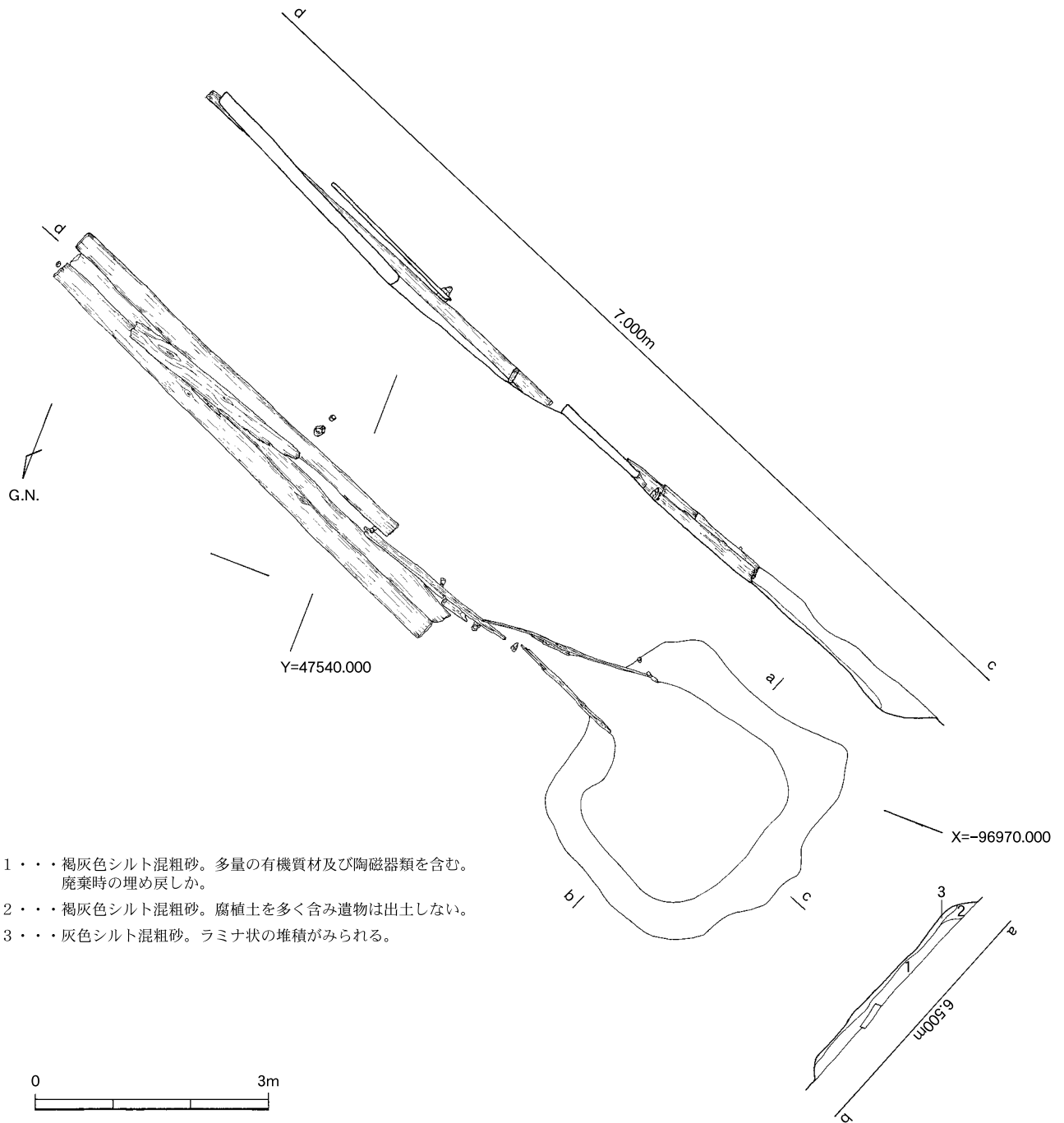


第27図 3号溝状遺構出土遺物【瓦】(1:4)

(2) 土坑【第28図】

調査区の南東側で確認された一辺約2.6m～3.4mの方形の土坑である。土坑に接続するような形で、杭でおさえられた板材と3本の丸太が検出された。板材は東に向かいV字に閉じるように立てられており、その先に東西方向に3本の丸太が並べられている。最も長いもので6.6m、短いもので5.5mであり周囲に杭を打ち付けて固定してある。樹皮ははがされていない。なお、樹種は全てスギで年輪数は最多のもので41本であった。丸太の分析の詳細については第IV章で記述する。

土坑内からは、木製品、瓦、陶磁器類などが廃棄されたような状態で出土している。



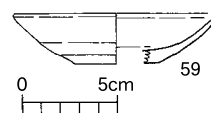
第28図 土坑実測図 (平面図 1 : 80)

・出土遺物

a. 土師器【第29図】

59は土師器の小皿である。復元口縁径10.9cm、復元底部径4.5cmで、底部は糸で切り離されている。

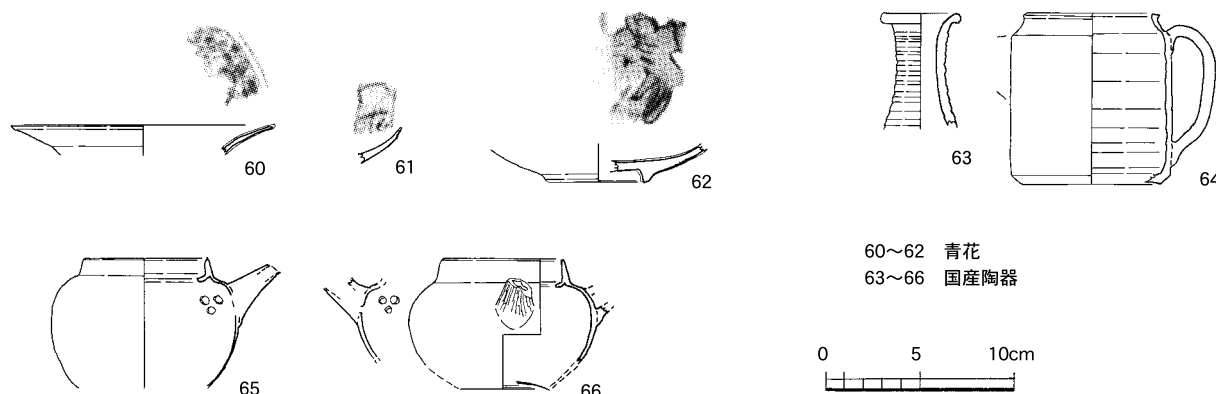
その他、焙烙の一部と考えられる破片も出土している。



第29図 土坑出土遺物【土師器】(1:4)

b. 陶磁器類【第30図】

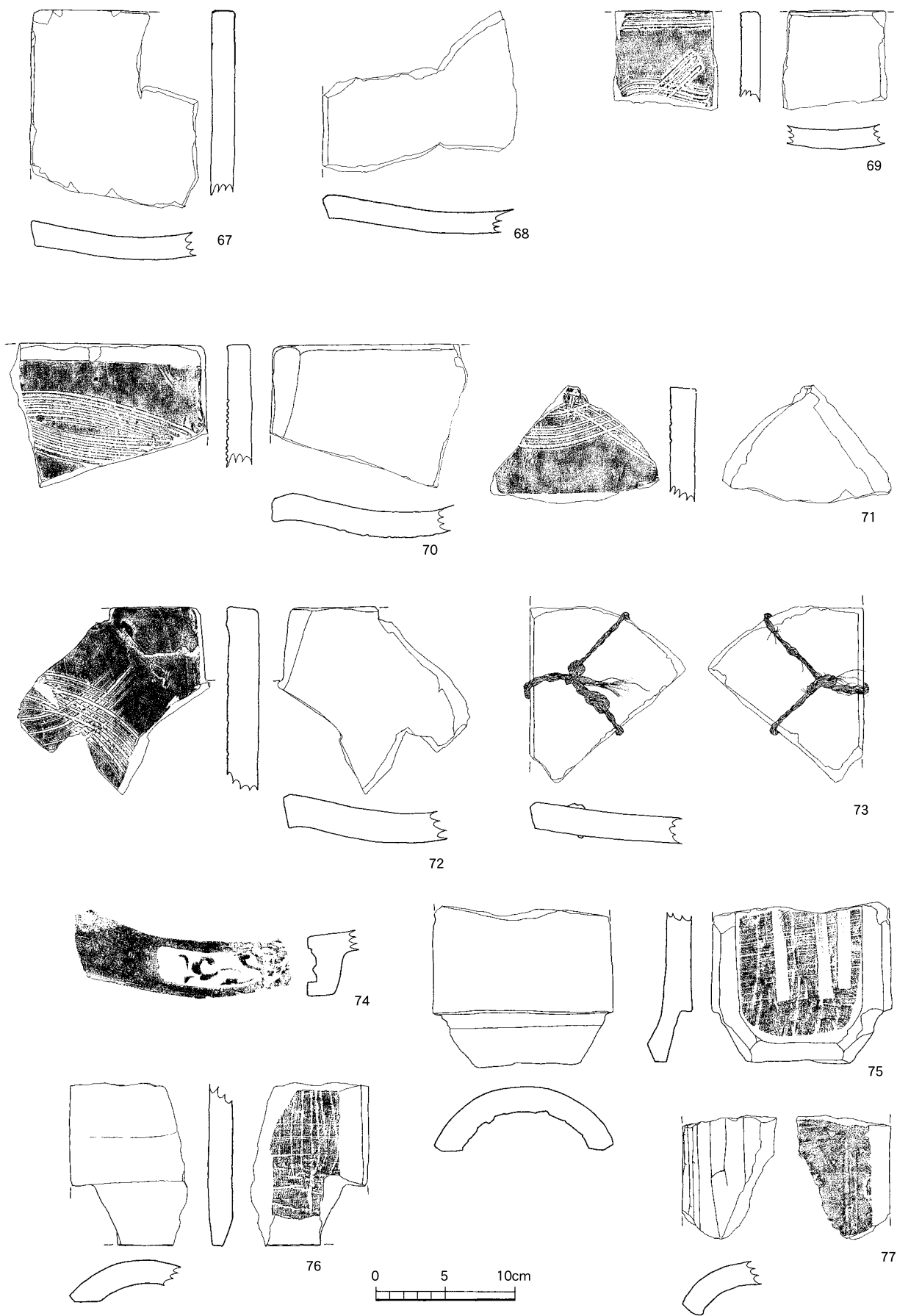
60～62は青花である。60は皿の口縁部で、粗い青海波紋と植物が意匠化された紋様が施される。61は小碗であろうか。内外面に同心円状に施された圏線が確認できる。62は皿の底部付近である。残存部が少なく復元は難しいが、見込部に文様が施されていることが分かる。一様に釉が比較的厚く施されている。63～66は国産陶器である。63は長頸の瓶である。頸部に連続した沈潜が巡る。内外ともに鉄釉がかかっている。唐津か。64は汁次である。内外ともに褐釉が施されている。注口部は欠損している。瀬戸系のもと考えられる。65と66は急須である。どちらも非常に薄手で胎土調、焼き締め具合も酷似している。いずれかは不明であるが同一の産地のものと考えられる。外面は黒変しており、火にかけられた結果煤などに影響されたものと考えられる。なお、65の外面には「白・草・原・頭・望・京・師・黄・河・水・盡」の文字が確認でき、唐代の詩人「王昌齡」作の「出塞行」が記されていたようである。



第30図 土坑出土遺物【陶磁器類】(1:4)

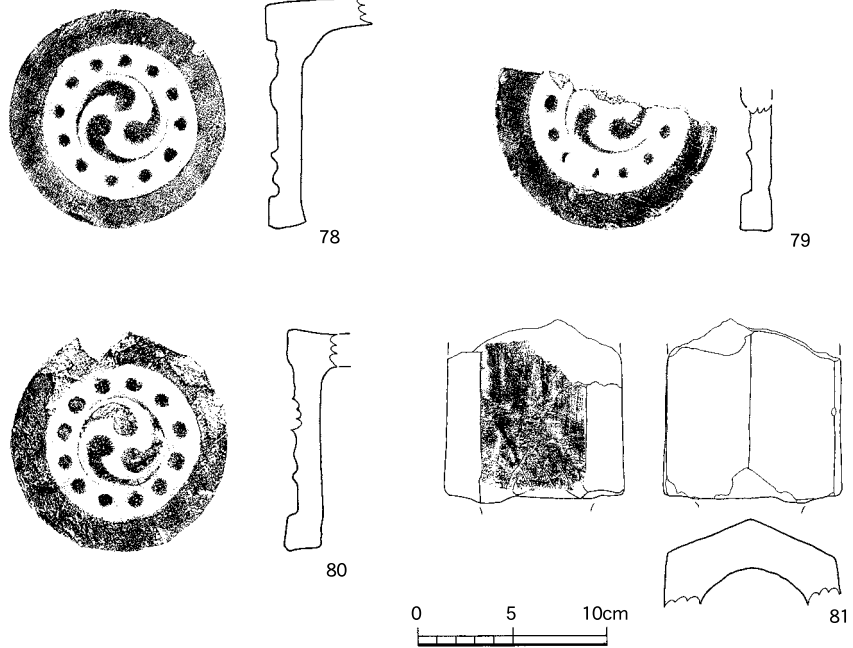
c. 瓦【第31図・第32図】

67から73は平瓦である。69から72は下面に状痕が走る。銘などは確認できなかった。73は棕櫚の紐が巻かれた瓦片である。土坑内からは多くの木製品も出土しており、土坑内には水流があったと考えられることから、木製品廃棄時の重石として使用されたのかもしれない。74は軒平瓦の瓦当てである。唐草文様の一部が確認できる。



第31図 土坑出土遺物【平瓦・軒平瓦・丸瓦】（1：4）

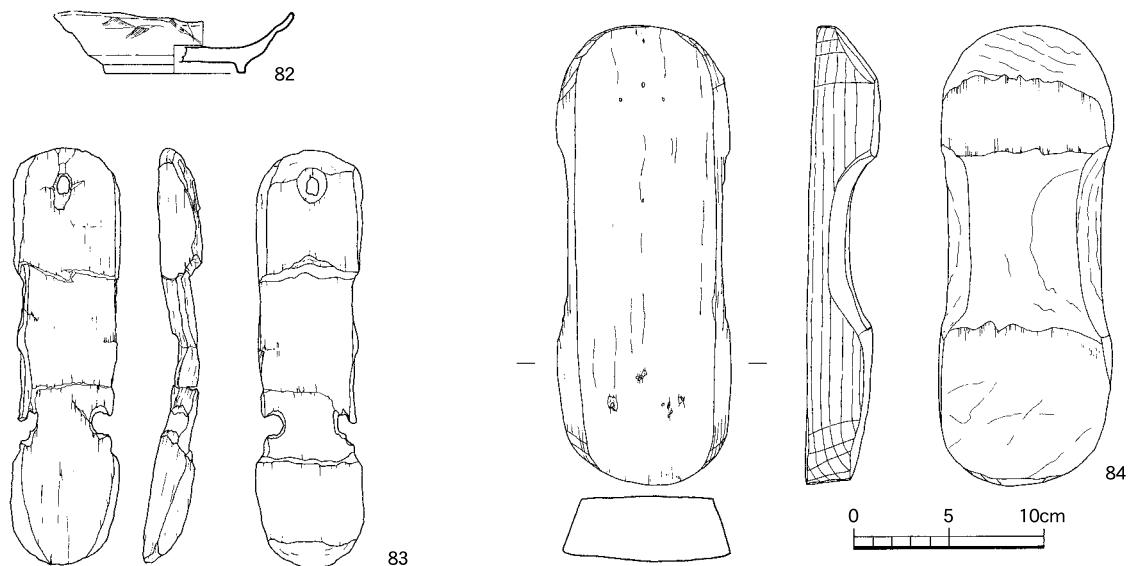
75から77は丸瓦である。内面には布目の痕跡が確認でき、75・76は接続部付近の破片である。78～80は軒丸瓦の瓦当てである。中心部に頭部の大きな巴文、周辺部に大きめの珠文を配置する典型的な近世瓦である。81は丸瓦の変形であろうか外面に稜線が入り、断面が五角形を成している。丸瓦と同じく内面に布目の痕跡が確認できる。



第32図 土坑出土遺物【軒丸瓦・その他】（1：4）

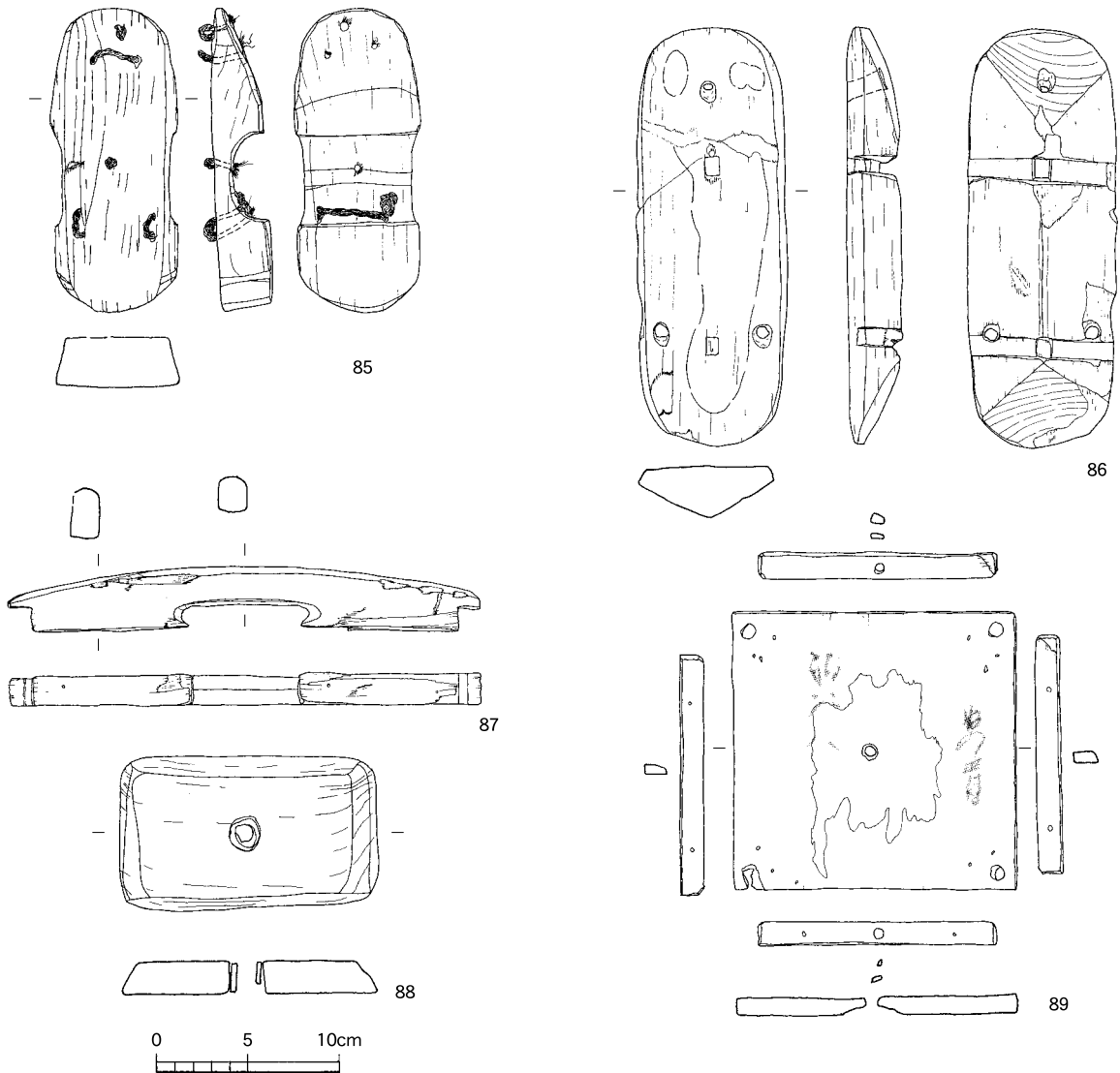
e. 木製品【第33図・第34図】

82は漆器の椀で木地はブナ属のものである。外面は緑色、内面は黒色を呈し、外面には金粉で蒔絵が施される。出土状態が非常に悪く、土圧でひしゃげた状態である。下地は膠着剤に柿渋、混和剤に木炭粉を使用し、漆層構造は、内面は透明漆2層、外面は緑色漆と考えられるものが1層である。83～86は下駄である。83はキリ製で一木造りで三つの眼が確認できる。非常に状態が悪く、全体が劣化している。84は一木造りスギ製で爪先から4cm、9cm、20cmのあたりに鉄製の釘のあとが残っており表が付いた草履下駄であったと考えられる。85は長さ17cm弱と非常に小さく、子供用の下駄であったと考えられる。一木造りスギ製、無眼であり表を棕櫚の紐で止めてあったようである。86は差歯の露卯下駄でニガキ製、三つの眼が穿たれている。87は行燈の把手と考えられる。スギ製で幅25.7cm、高さ3.5cmを計る。88はコウヤマキ製の台である。中心部に円孔が穿たれており、その中に支脚部を成したと考えられる竹が差し込まれていたようである。89はスギ製の箱蓋である。火鉢盆に転用されていたようであり、中央部は焦



第33図 土坑出土遺物【漆器・下駄】（1：4）

げて窪んでいる。表面には墨書で「ねの正月 泥谷」と記してあるのがわかる。裏面には木釘で留められたかえりが四方に付く。



第34図 土坑出土遺物【下駄・把手・台・箱蓋】（1：4）

f. その他の遺物

その他、土坑内からは土錘、砥石などが出土している。

（3）濠汀線【第3図】

調査区からは、旧濠の汀線と考えられる段落ちが確認された。段落ちは25°から30°西に傾き調査区を南北に横切る。ほぼ、現在の濠と平行しており、造成前の濠の汀線と判断した。汀線より東側から出土した遺物から、18世紀後半あたりには三ノ丸が拡張されたものと考えたい。

3 その他の遺構と出土遺物

（1）ピットと出土遺物【第35図】

調査区内からは径20～30cm程度のピットが数基確認された。柱痕跡が確認できたものもあり、柱状の

構造物の痕跡であることは疑いはないが、規格性は見いだせない。1号ピットには根固め石と考えられる礫が確認できた。また、1号ピットからは、角釘（第35図90）が出土している。



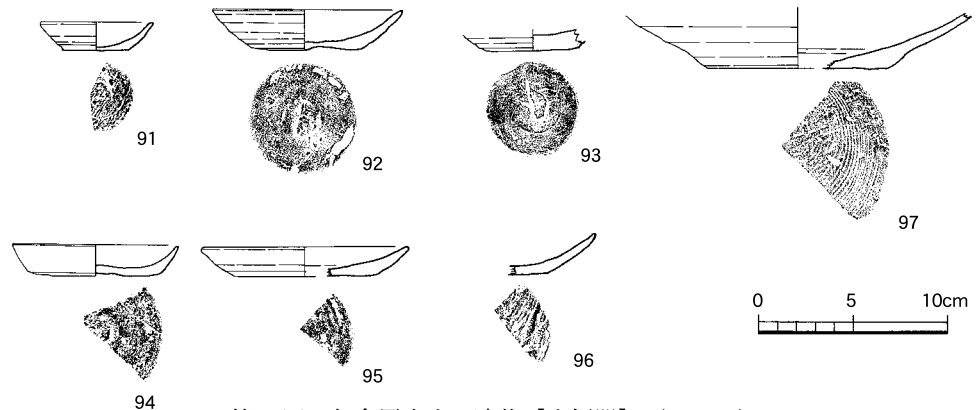
第35図 1号ピット及び1号ピット出土遺物

4 包含層出土の遺物

包含層内から土師器、陶磁器類等が出土した。そのほとんどが造成土内からである。

(1)土師器【第36図】

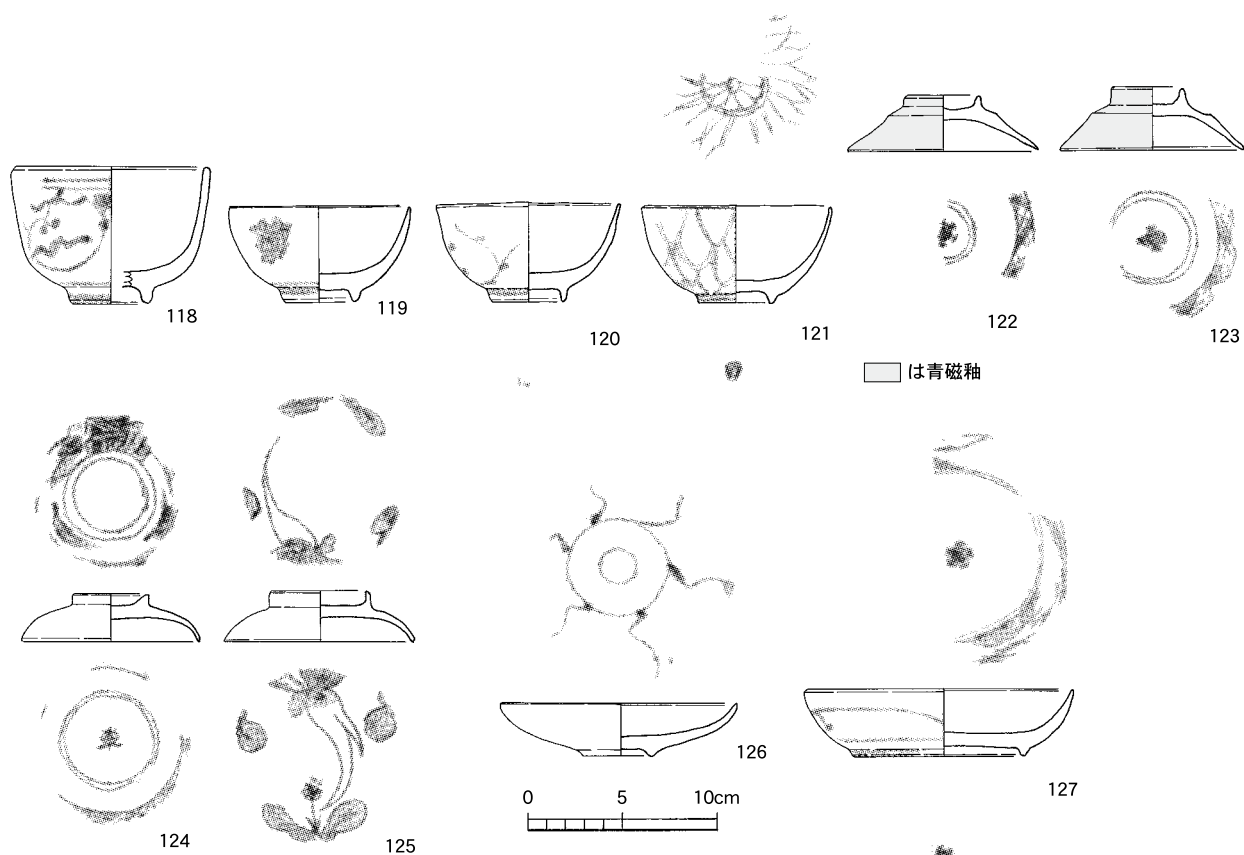
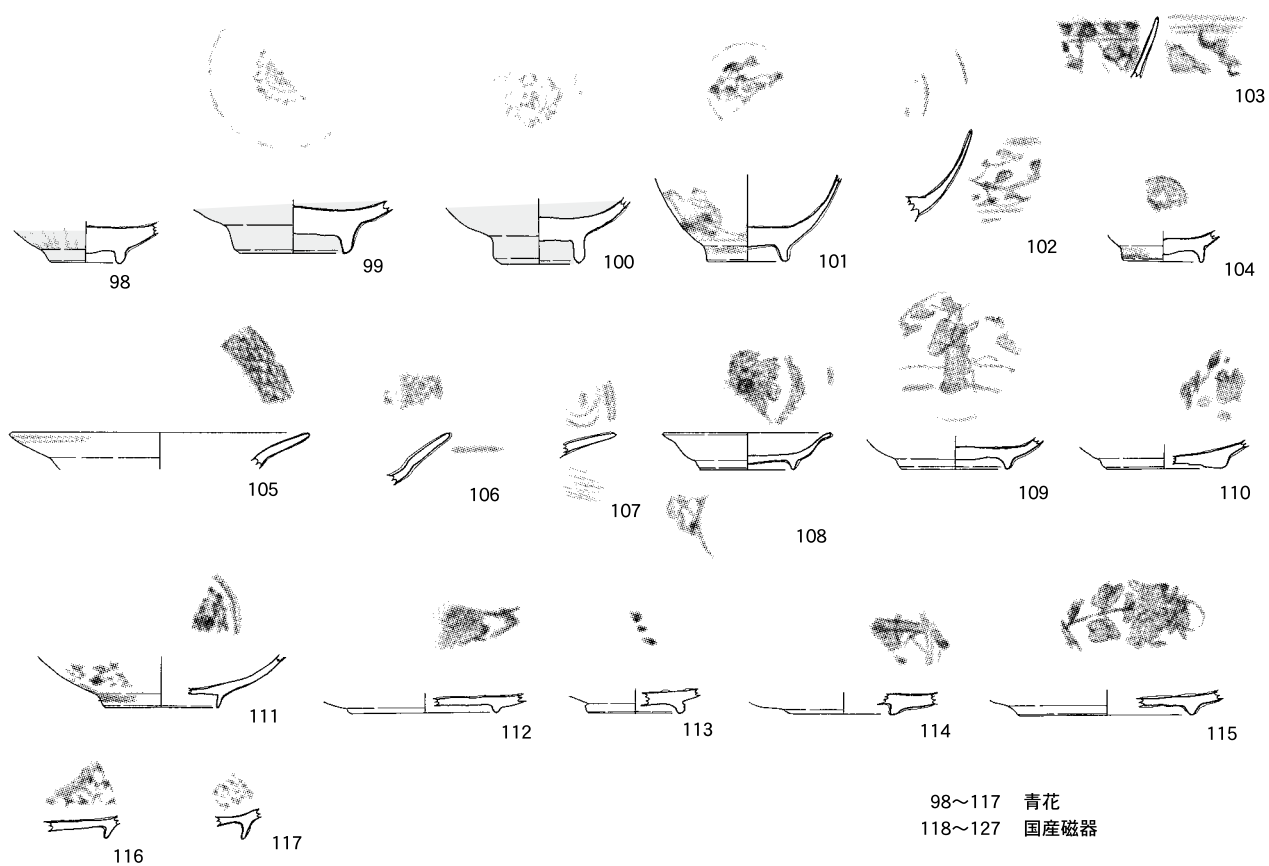
91～97は土師器である。91～93は土師器の小皿で、内外面に煤が付着しており灯明皿と考えられる。94～96も土師器の小皿であるが、煤の付着はみられない。97は坏の底部と考えられる。底部の切り離しは97が糸切り離しである以外は、ヘラ状工具で切り離されているようである。



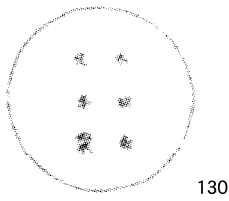
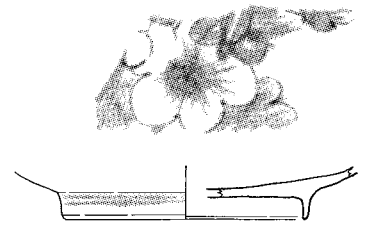
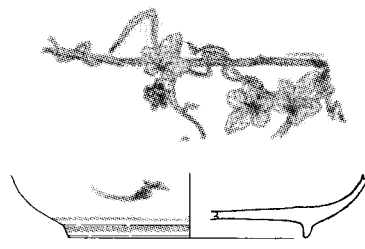
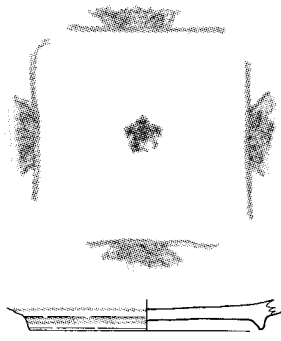
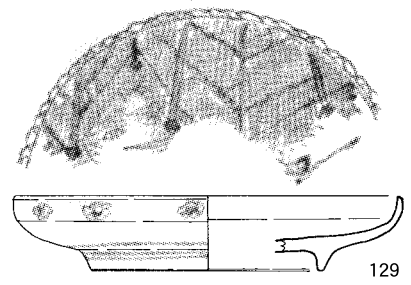
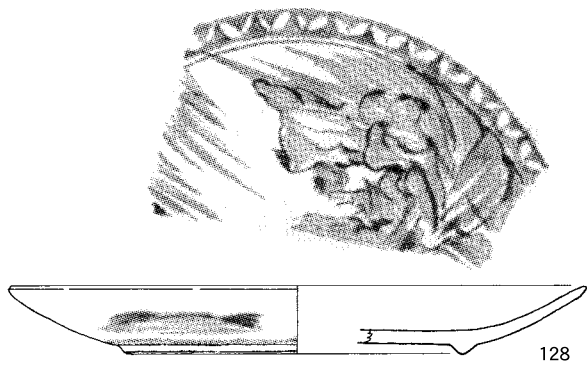
第36図 包含層出土の遺物【土師器】（1：4）

(2)陶磁器【第37・38・39図】

98～100は青磁の碗である。98は鎗蓮弁の一部が確認できる。99と100は見込部に印花文が確認できる。101～117は青花である。101～104は碗、105～108は皿、109～115は皿の底部、116と117は小片で器形の判断は難しい。その他、輸入陶磁としては、華南三彩の破片（図版7-6）が出土している。118～121は肥前系の染付けの碗である。122～125は碗蓋である。122と123は外面に青磁釉がかかる。122と123は筒形碗、124と125は丸碗の蓋であろうか。126～132は染付けの皿、133と134は段重の蓋であろうか。135と136は染め付けの小皿、137と138は水滴である。137は上面に浜千鳥の意匠が施されている。138は鶏をかたどった水滴である。139は白磁の菊花皿である。稜線により24弁の花弁が表現され、内面に16弁の菊花文が描かれている。140と141は合子の蓋で、140は外面に赤絵が施されている。141は外面に多条の沈線が施され貝殻を模しているようである。142と143は唐津の鉢である。内面に櫛刷毛目が施されている。144は肥前の甕の口縁部、145は胴部である。外面は鉄釉が施され黒色である。146は備前の皿、147備前の甕の頸部と思われる。148は瀬戸美濃系の水甕、149は瀬戸系の三足鉢である。148は口縁部が



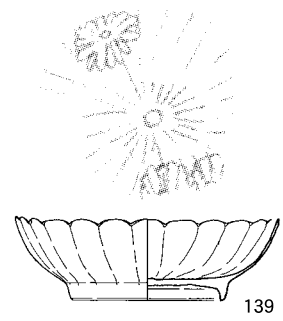
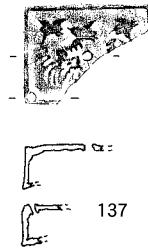
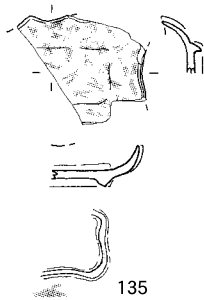
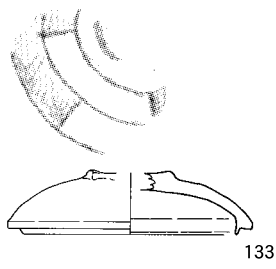
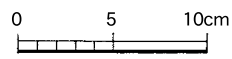
第37図 包含層出土の遺物【陶磁器類①】 (1:4)



130

131

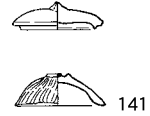
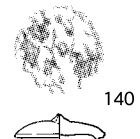
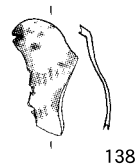
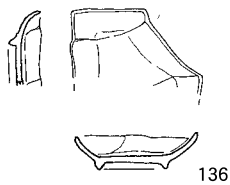
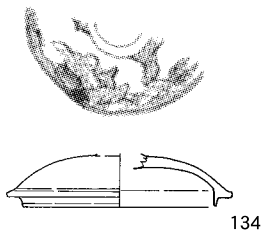
132



133

137

139



134

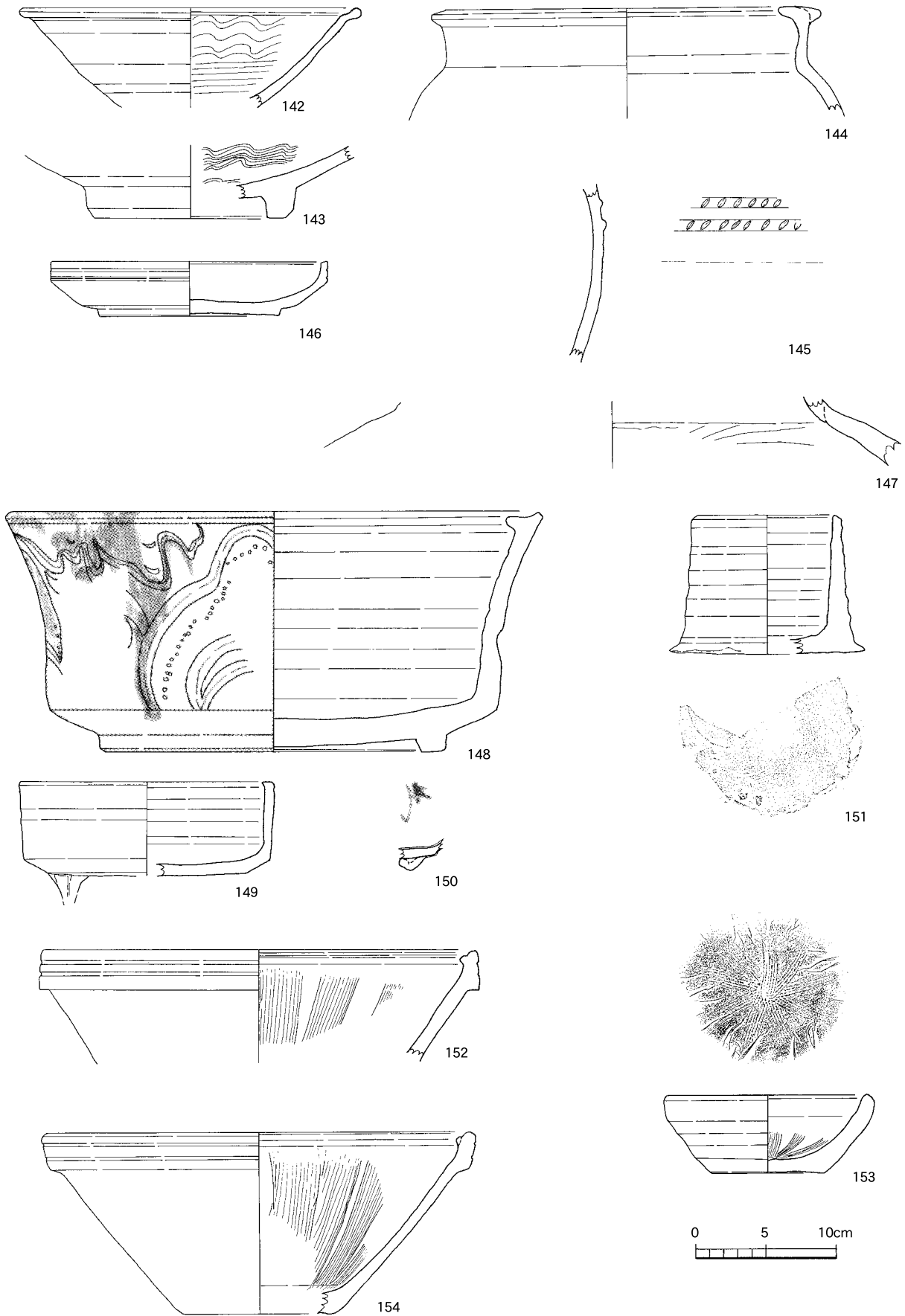
136

138

140

141

第38図 包含層出土の遺物【陶磁器類②】 (1:4)

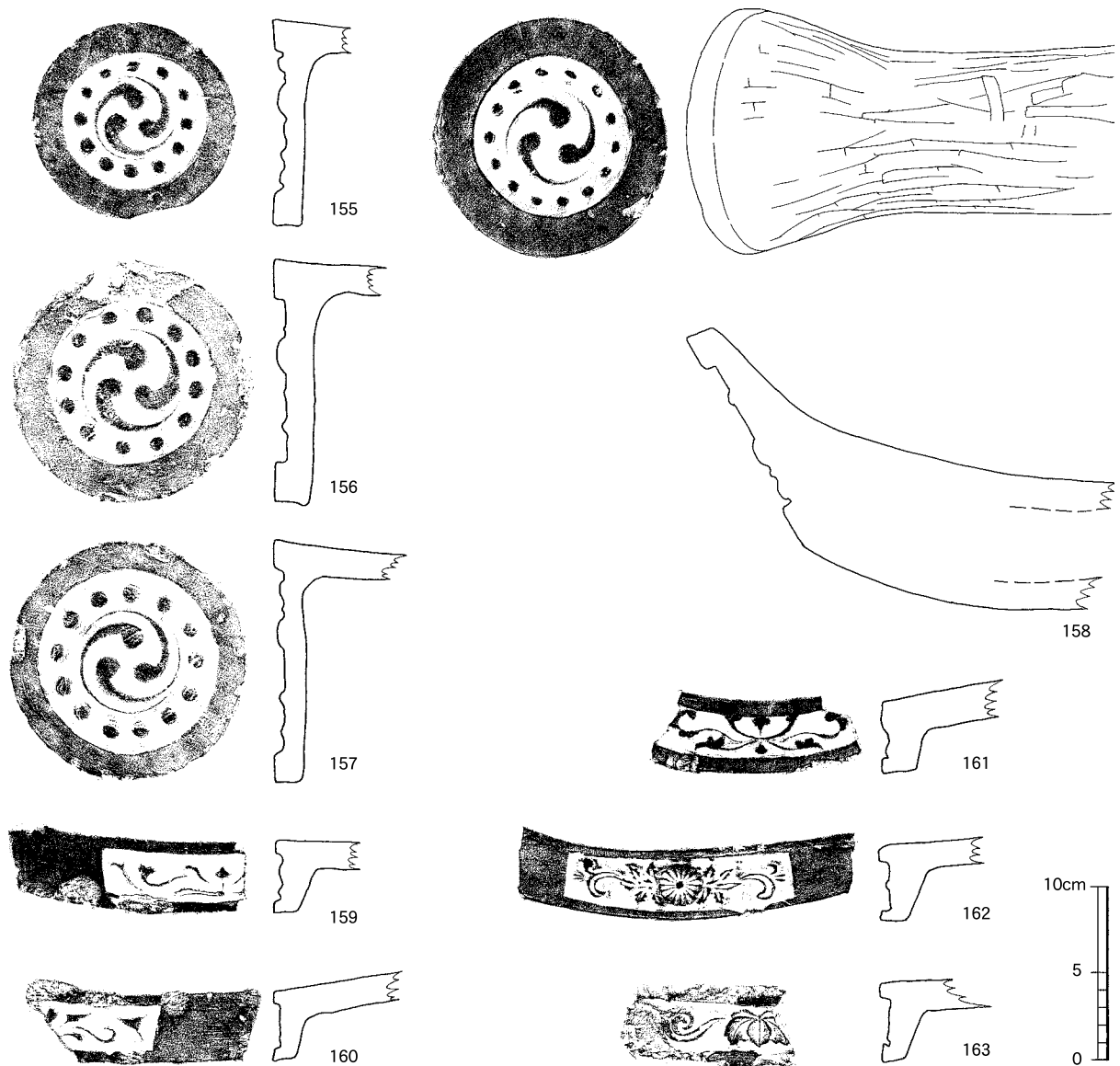


第39図 包含層出土の遺物【陶磁器類③】（1：4）

やや下降し、鉄釉と緑釉がかけられる。149は内外面ともに褐釉が施されている。150は志野の有足の皿と考えられる。151は、窯道具のサヤと考えられる。152～154は播鉢である。152と153は外面をケズリの調整をされており関西系の播鉢と考えられる。154は焼成器形などから備前の播鉢と考えられる。

(3)瓦【第40図】

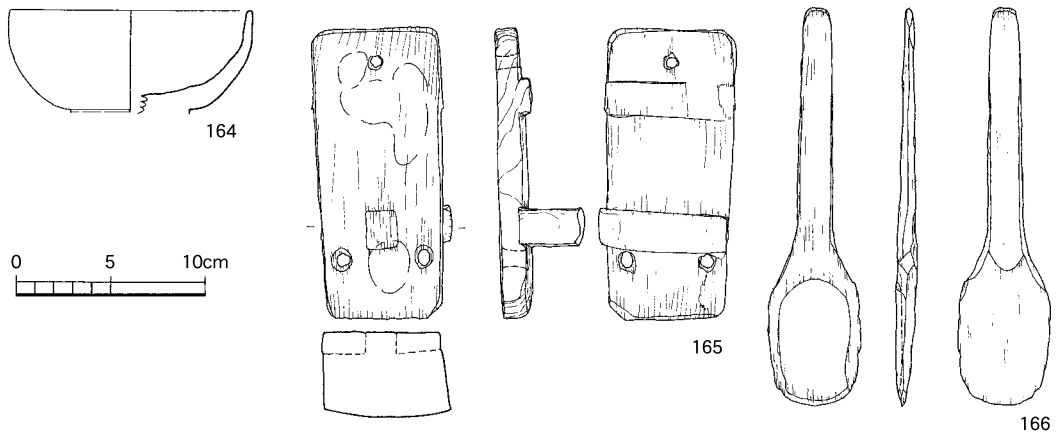
155～163は瓦である。155～157は軒丸瓦の、159～163は軒平瓦の瓦当ての部分である。155～157の瓦当て部分は、比較的頭部の大きい巴文が施され、その周囲に大きめの珠文が巡る。159～161の瓦当ては唐草文様が、162と163にはそれぞれ唐草文に加え菊花文と桐文が施されている。158は鳥衾である。158は外面を工具で削って曲面を作り出しており、工具の痕跡が確認できる。瓦当て部分は、軒丸瓦と同様に巴文と珠文で構成される。



第40図 包含層出土の遺物【瓦】 (1:4)

(4)木製品【第41図】

164～166は木製品である。164は漆器の椀で木地はクリである。内外面ともに膠着剤に柿渋、混和剤に木炭粉を使用し、ベンガラ混入の赤色漆層が1層確認さ

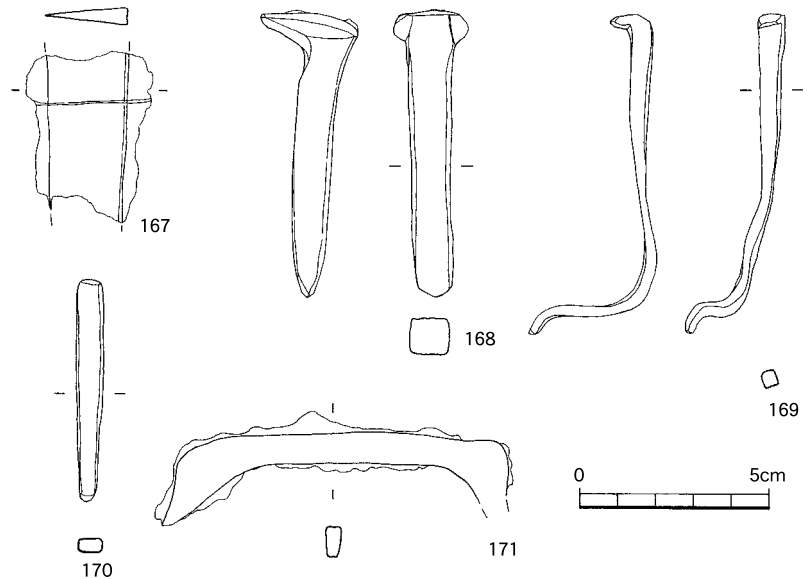


第41図 包含層出土の遺物【木製品】 (1:4)

れている。165は露卯下駄で、全長が15.5cmと小さく、小児用であると考えられる。材質はコウヤマキである。下駄の前方の歯は本体と一体で作られており、後方の歯のみが差し歯である。足裏の痕跡が残っており、右足用だと分かる。166は木製の匙で、材質はモミである。

(5)鉄製品【第42図】

167～172は鉄製品である。167は片刃の刃物の茎部分と考えられる。168～170は釘である。171は鏝である。167以外は建築材であり、調査地にあったかつての建築物に使用されていたと考えられる。



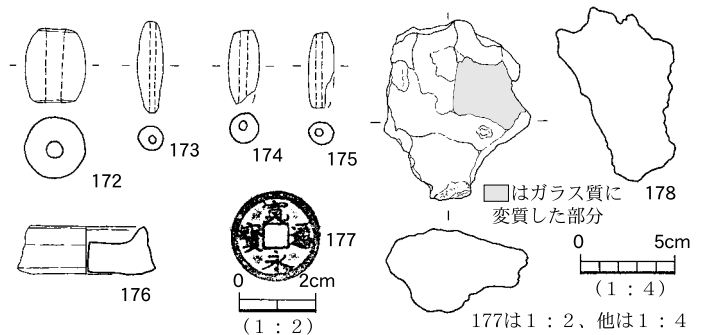
第42図 包含層出土の遺物【鉄製品】 (1:2)

(6)その他の遺物【第43図】

172～175は土錘で、全て土師質である。176は燭台と考えられる土師質の土器である。177は寛永通寶であり「寛」や「寶」の字体から古寛永と判断した。178は鉄滓である。重量は262gと大きさに比して重く、メタル分を多く含んでいると考えられる。その他、石臼などが出土している。

5 小結

今回の調査では、中世と近世の遺構や遺物が確認された。江戸時代に2度の造成が行われ、外堀が一部埋められていたことが確認できたことは大きな成果であった。



第43図 包含層出土の遺物【土錘・燭台・銭貨・鉄滓】

第3表 高鍋城三ノ丸跡 出土遺物観察表①

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
1	土師器	坏	口縁~底部	流路跡	12.5	2.9	2.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	良好	1mm以下の赤褐、灰色の砂粒を含む。	内外面に煤が付着。ヘラ切り難し。
2	土師器	坏	口縁~底部	流路跡	11.0	6.0	3.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	1mm以下の赤褐、黒褐。灰褐色の砂粒、微細な無色透明の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
3	土師器	坏	口縁~底部	流路跡	9.0	6.3	2.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	灰白	良好	1.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
4	土師器	坏	口縁部	流路跡	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	1mm以下の暗赤、黒褐、明褐色の砂粒、微細な無色透明の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
5	土師器	小皿	完形	流路跡	7.8	6.4	1.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	1.5mm以下の褐灰、にぶい橙、暗赤色の砂粒、微細な無色透明の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
6	土師器	小皿	口縁~底部	流路跡	8.1	6.6	1.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	0.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
7	土師器	小皿	口縁~底部	流路跡	8.8	6.8	1.8	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	良好	1mm以下の暗赤褐、浅黄橙、褐灰、明褐、橙色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
8	土師器	小皿	口縁~底部	流路跡	8.1	7.1	1.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡橙	灰白	良好	1mm以下の灰褐、にぶい橙、橙色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
9	土師器	小皿	口縁~体部	流路跡	7.5	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	良好	精良	ヘラ切り難し。
10	土師器	-	底部	流路跡	-	8.8	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	良好	1mm以下の茶色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
11	土師器	-	底部	流路跡	-	6.9	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の赤褐色、白色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
12	土師器	-	底部	流路跡	-	6.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡橙	淡橙	良好	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
13	土師器	-	底部	流路跡	-	6.1	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	灰白	良好	1mm以下の茶色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
14	須恵器	捏鉢	口縁~体部	流路跡	28.0	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰	青灰	堅緻	1mm以下の白色の砂粒を含む。	
15	須恵器	捏鉢	底部付近	流路跡	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	堅緻	5mm以下の灰、2.5mm以下の茶、1mm以下の白色の砂粒を含む。	
16	須恵器	捏鉢	口縁部	流路跡	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	堅緻	1mm以下の白色の砂粒を含む。	
17	青磁	碗	口縁~底部	流路跡	16.2	6.2	7.0	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	釉調 オリブ灰	胎土調 灰	堅緻	精緻	龍泉窯系劃花文青磁。底部付近から回転ヘラ削り。
18	白磁	皿	底部	流路跡	-	5.7	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精緻	白磁皿区類(横田・森田1978)
19	瓦質焼成土器	甕	口縁部	流路跡	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗灰	暗灰	良好	4mm以下の灰色の砂粒を含む。	
20	瓦質焼成土器	甕	頸~体部	流路跡	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	灰	灰	良好	3mm以下の灰・茶色の砂粒を含む。	
21	瓦質焼成土器	甕	体部	流路跡	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	灰	灰黄褐	良好	2mm以下の灰白、褐灰、褐色、無色透明の砂粒を含む。	
22	瓦質焼成土器	甕	底部付近	流路跡	-	-	-	格子目タタキ	ユビオサエ	灰	黄灰	良好	2mm以下の灰白、褐灰色の砂粒を含む。	
23	瓦質焼成土器	甕	体部	流路跡	-	-	-	格子目タタキ	回転ヨコナデ	暗灰	黄灰	良好	3mm以下の灰白、褐、褐灰色の砂粒を含む。	
24	瓦質焼成土器	甕	体部	流路跡	-	-	-	平行タタキ	平行当て具痕	灰白	暗灰	良好	1mm以下の褐灰、黒褐、にぶい橙、赤褐色、無色透明の砂粒を含む。	
25	瓦質焼成土器	甕	体部	流路跡	-	-	-	平行タタキ	ナデ	褐灰	灰白	良好	3mm以下の褐灰、灰白、乳白、暗褐色の砂粒を含む。	
26	瓦質焼成土器	甕	底部付近か	流路跡	-	-	-	格子目タタキ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2.5mm以下の灰白、褐灰、暗褐、明褐、灰褐色の砂粒を含む。	
27	陶器	瓶子	底部	流路跡	-	9.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	堅緻	精良	古瀬戸瓶子
28	土器	土鉢	完形	流路跡	長さ5.3cm・最大径2.0cm・重量17.0g重					にぶい橙	-	良好	精良	
29	鉄滓	-	-	流路跡	重量、50.0g重			-	-	-	-	-	-	
30	土師器	不明	底部	1号溝状遺構	-	8.3	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	0.5mm以下の灰、茶色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
31	土師器	不明	底部	1号溝状遺構	-	8.0	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	良好	微細な茶色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
32	土師器	小皿	口縁~底部	1号溝状遺構	8.5	6.3	1.3	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	微細な茶色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
33	土師器	小皿	口縁~底部	1号溝状遺構	8.3	5.5	1.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の茶、灰色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
34	土師器	不明	底部付近	1号溝状遺構	-	-	-	-	ハケメ状の工具痕	にぶい黄橙	淡赤橙	良好	微細な灰色の砂粒を含む。	ヘラ切り難し。
35	須恵器	甕	胴部	1号溝状遺構	-	-	-	平行タタキ	同心円当て具痕	灰	灰	堅緻	3mm以下の灰白色の砂粒を含む。	
36	青磁	碗	口縁~体部	1号溝状遺構	-	-	-	-	-	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰白	堅緻	精良	青磁端反碗
37	白磁	八角鉢	口縁~体部	1号溝状遺構	7.5	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精緻	
38	陶器	耳壺	口縁~体部	1号溝状遺構	10.6	-	-	-	-	釉調 暗褐	胎土調 灰白	堅緻	1mm以下の過食の砂粒を含む。	
39	瓦質焼成土器	捏鉢	口縁~体部	1号溝状遺構	29.0	-	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	良好	1mm以下の白色の砂粒を含む。	在地系か。
40	陶器	摺鉢	底部	1号溝状遺構	-	13.0	-	ナデ	ナデ	暗赤褐	暗褐	堅緻	3mm以下の白色の砂粒を含む。	備前
41	陶器	碗	体~底部	1号溝状遺構	-	3.8	-	回転ヘラケズリ	-	釉調 暗赤褐	胎土調 灰白	堅緻	精良	天目型
42	土器	土鉢	-	1号溝状遺構	重量43.0g重					浅黄橙	浅黄橙	良好	2mm以下の明赤褐、褐灰、灰黄褐、暗赤褐色の砂粒を含む。	
43	石製品	火打ち石	-	1号溝状遺構	最大長3.7cm・幅2.9cm・厚さ2.7cm・重量29.2g重					-	-	-	石材 チャート	
44	石製品	砥石	-	1号溝状遺構	現存長19.5cm・幅5.5cm・厚さ2.9cm・重量445.8g重					-	-	-	石材 砂岩	
45	土師器	-	底部付近	2号溝状遺構	-	8.2	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	精良	

第4表 高鍋城三ノ丸跡 出土遺物観察表②

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
46	土師器	—	底部付近	2号溝状遺構	—	7.0	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	浅黄橙	良好	精良	
47	土師器	—	底部付近	2号溝状遺構	—	8.3	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	精良	
48	青磁	輪花皿	口縁~体部	2号溝状遺構	—	11.8	—	—	—	釉調 オリーブ灰	胎土調 灰白	堅緻	精緻	龍泉窯系
49	土器	土錘	—	2号溝状遺構	重量 4.4g 重				灰黄橙	—	良好	0.5mm以下の黒・白色の砂粒を含む。		
50	土師器	坏	底部付近	3号溝状遺構	—	11.3	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	良好	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	糸切り離し。
51	土師器	小皿	口縁~底部	3号溝状遺構	11.1	5.9	2.2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。内外面に煤が付着。
52	土師器	—	底部付近	3号溝状遺構	—	5.1	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	良好	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
53	青花	皿	底部付近	3号溝状遺構	—	3.4	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	碁筈底。
54	青花	皿	口縁~体部	3号溝状遺構	11.6	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰黄	堅緻	精良	
55	陶器	碗	底部付近	3号溝状遺構	—	4.0	—	回転ヘラケズリ	—	釉調 黒褐	胎土調 にぶい赤褐	堅緻	精良	天目型
56	陶器	皿	底部付近	3号溝状遺構	—	3.2	—	—	回転ヨコナデ	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰白	堅緻	精良	糸切り離し。唐津か。
57	瓦	丸瓦	—	3号溝状遺構	現存長 16.3cm・幅 12.3cm・厚さ 1.6cm				灰白	灰	良好	2mm以下の灰色の砂粒を含む。		
58	瓦	丸瓦	—	3号溝状遺構	現存長 16.7cm・幅 8.4cm・最大厚 2.7cm				灰	灰	良好	0.5mm以下の黒色の砂粒を含む。		
59	土師器	小皿	口縁~底部	土坑	10.9	4.5	2.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の白色の砂粒を含む。	糸切り離し。
60	青花	皿	口縁部付近	土坑	—	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	
61	青花	小碗	口縁部付近	土坑	—	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	
62	青花	皿	底部付近	土坑	—	4.8	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰黄	堅緻	精良	
63	陶器	瓶	口縁~頸部	土坑	4.2	—	—	—	回転ヨコナデ	釉調 暗茶褐	胎土調 赤褐	堅緻	精良	外面鉄釉塗布。
64	陶器	汁次	口縁~底部	土坑	7.7	7.2	9.1	—	回転ヨコナデ	釉調 茶褐	胎土調 灰白	堅緻	精良	内外面ともに褐釉。注口部欠損。
65	陶器	急須	口縁~体部	土坑	6.4	—	—	—	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	良好	精良	外面に「王昌齡」作の「出塞行」が書かれる。
66	陶器	急須	口縁~底部	土坑	6.4	4.5	6.9	—	回転ヨコナデ	褐灰	灰白	良好	精良	
67	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 13.3cm・幅 12.1cm・厚さ 1.6cm				灰	灰	良好	3mm以下の灰・1mm以下の白色の砂粒を含む。		
68	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 11.6cm・幅 14.0cm・厚さ 1.6cm				暗灰	黒	良好	3mm以下の灰色の砂粒を含む。		
69	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 7.2cm・幅 7.4cm・厚さ 1.4cm				灰	灰	良好	2mm以下の灰色の砂粒を含む。		
70	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 10.4cm・幅 14.1cm・厚さ 1.8cm				暗灰	灰白	良好	2.5mm以下の灰色の砂粒を含む。		
71	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 8.5cm・幅 12.1cm・厚さ 1.8cm				灰	灰	良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。		
72	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 13.5cm・幅 13.8cm・厚さ 2.3cm				灰	灰	良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。		
73	瓦	平瓦	—	土坑	現存長 12.5cm・幅 11.2cm・厚さ 1.9cm				灰	暗灰	良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。	棕櫚紐が結ばれる。	
74	瓦	軒平	—	土坑	—				灰	灰	良好	6mm以下の灰色の砂粒を含む。		
75	瓦	丸瓦	—	土坑	—				暗灰	暗灰	良好	1mm以下の黒色の砂粒を含む。	内面に板状の圧痕。	
76	瓦	丸瓦	—	土坑	—				暗灰	灰	良好	2mm以下の灰色の砂粒を含む。		
77	瓦	丸瓦	—	土坑	—				灰	灰	良好	2mm以下の黒色の砂粒を含む。		
78	瓦	丸瓦	—	土坑	—				暗灰	暗灰	良好	2mm以下の灰色の砂粒を含む。		
79	瓦	軒丸	—	土坑	—				暗灰	暗灰	良好	4mm以下の灰色の砂粒を含む。		
80	瓦	軒丸	—	土坑	—				暗灰	暗灰	良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。		
81	瓦	—	—	土坑	—				灰白	暗灰	良好	2mm以下の灰色の砂粒を含む。		
82	木器	漆器椀	口縁~底部	土坑	—				緑~黒色漆	黒色漆	—	内外面：下地柿渋（木炭粉混） 材：フナ属	蒔絵あり、顔料に石黄、藍を使用。	
83	木器	下駄	—	土坑	長 22.0cm・幅 5.3cm・厚さ 2.3cm				—	—	—	材：キリ		
84	木器	下駄	—	土坑	長 24.4cm・幅 9.1cm・厚さ 3.6cm				—	—	—	材：スギ	無眼・草履下駄	
85	木器	下駄	—	土坑	長 16.6cm・幅 6.9cm・厚さ 2.9cm				—	—	—	材：スギ	無眼・草履下駄	
86	木器	下駄	—	土坑	長 22.9cm・幅 8.2cm・厚さ 3.0cm				—	—	—	材：ニガキ		
87	木器	把手	—	土坑	長 25.7cm・幅 3.5cm・厚さ 2.8cm				—	—	—	材：スギ		
88	木器	台	—	土坑	縦 8.5cm・横 15.2cm・厚さ 1.8cm				—	—	—	材：コウヤマキ		
89	木器	箱蓋	—	土坑	縦 14.1cm・横 15.4cm・厚さ 1.0cm				—	—	—	材：スギ	火鉢に転用。「ねの正月 泥谷」の墨書有り。	

第5表 高鍋城三ノ丸跡 出土遺物観察表③

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
90	鉄器	釘	—	1号ビット	現存長 10.8cm・幅 0.9cm・重さ 26 g重			—	—	—	—	—	—	—
91	土師器	小皿	口縁~底部	—	5.9	3.6	1.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	にぶい黄橙	良好	1mm以下の赤褐・茶・灰白色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
92	土師器	小皿	口縁~底部	—	10.4	5.7	2.2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	良好	2.5mm以下の灰褐・赤褐・黒褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
93	土師器	小皿	底部付近	—	—	5.0	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
94	土師器	小皿	口縁~底部	—	8.8	7.0	1.7	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡橙	淡橙	良好	1mm以下の明赤褐・褐灰・明褐・灰白色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
95	土師器	小皿	口縁~底部	—	10.8	7.4	1.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡橙	にぶい橙	良好	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
96	土師器	小皿	口縁~底部	—	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	灰白	良好	1mm以下の褐灰・灰白・赤褐色の砂粒を含む。	ヘラ切り離し。
97	土師器	坏	底部付近	—	—	9.6	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	灰白	良好	1mm以下の茶色の砂粒を含む。	糸切り離し。
98	青磁	碗	底部付近	—	—	3.2	—	—	—	釉調 オリーブ灰	胎土調 灰白	堅緻	精良	鍋蓮弁。
99	青磁	碗	底部付近	—	—	5.2	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	印花。
100	青磁	碗	底部付近	—	—	4.4	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	印花。
101	青花	碗	胴部~底部	—	—	3.4	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	
102	青花	碗	口縁~体部	—	—	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	
103	青花	碗	口縁部付近	—	—	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 橙	堅緻	精良	
104	青花	碗	底部付近	—	—	3.9	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
105	青花	皿	口縁~体部	—	15.4	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 浅黄橙	堅緻	精良	
106	青花	皿	口縁~体部	—	—	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
107	青花	皿	口縁部付近	—	—	—	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
108	青花	皿	口縁~底部	—	8.6	4.7	2.0	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
109	青花	皿	底部付近	—	—	5.4	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
110	青花	皿	底部付近	—	—	6.0	—	—	—	釉調 明緑灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
111	青花	皿	体部~底部	—	—	5.8	—	—	—	釉調 明緑灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
112	青花	皿	底部付近	—	—	9.4	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
113	青花	皿	底部付近	—	—	4.4	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
114	青花	皿	底部付近	—	—	4.8	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
115	青花	皿	底部付近	—	—	8.8	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
116	青花	—	底部付近	—	—	—	—	—	—	釉調 明青灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
117	青花	—	底部付近	—	—	—	—	—	—	釉調 明青灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
118	染付	碗	口縁~底部	—	9.8	4.0	7.3	—	—	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
119	染付	碗	口縁~底部	—	9.4	2.6	5.1	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
120	染付	碗	口縁~底部	—	9.5	3.6	5.3	—	—	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
121	染付	碗	口縁~底部	—	9.9	3.6	5.1	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
122	染付	碗蓋	つまみ部~口縁部	—	9.9	3.6	3.0	—	—	釉調 外：明緑灰 内：灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
123	染付	碗蓋	つまみ部~口縁部	—	9.4	3.4	3.4	—	—	釉調 外：明緑灰 内：灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
124	染付	碗蓋	つまみ部~口縁部	—	9.8	3.6	2.6	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
125	染付	碗蓋	つまみ部~口縁部	—	9.8	5.0	2.7	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
126	染付	皿	口縁~底部	—	12.0	3.5	2.8	—	—	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
127	染付	皿	口縁~底部	—	13.4	7.7	2.5	—	—	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
128	染付	皿	口縁~底部	—	30.0	17.2	3.6	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
129	染付	皿	口縁~底部	—	30.2	11.6	3.0	—	—	釉調 明オリーブ灰	胎土調 灰	堅緻	精良	
130	染付	皿	底部付近	—	—	11.9	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	
131	染付	皿	体部~底部	—	—	12.0	—	—	—	釉調 灰白	胎土調 灰	堅緻	精良	

第6表 高鍋城三ノ丸跡 出土遺物観察表④

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		焼成	胎土の特徴	備考	
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面				
132	染付	皿	底部付近	-	-	12.4	-	-	-	釉調 明青灰	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
133	染付	段重蓋	つまみ部 ~ 口縁部	-	11.0	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
134	染付	段重蓋	つまみ部 ~ 口縁部	-	10.0	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
135	染付	小皿	口縁~ 底部	-	-	-	2.2	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
136	染付	小皿	口縁~ 底部	-	-	-	1.6	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
137	染付	水滴	-	-	-	-	2.4	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
138	染付	水滴	-	-	-	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
139	白磁	皿	口縁~ 底部	-	13.8	7.2	3.3	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
140	染付	合子蓋	つまみ部 ~ 口縁部	-	3.6	-	1.5	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
141	白磁	合子蓋	つまみ部 ~ 口縁部	-	3.6	1.0	1.7	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	灰	堅緻	精良	
142	陶器	鉢	口縁~ 体部	-	23.2	-	-	-	-	釉調 にぶ い黄褐	胎土調 明 赤褐	明	堅緻	精良	唐津。
143	陶器	鉢	底部付近	-	-	10.8	-	-	-	赤褐	赤褐		堅緻	精良	唐津。
144	陶器	甕	口縁~ 体部	-	21.6	-	-	-	-	釉調 黒	胎土調 黒	黒	堅緻	精良	肥前。
145	陶器	甕	体部	-	-	-	-	-	-	釉調 黒	胎土調 黒	黒	堅緻	精良	肥前。
146	陶器	皿	口縁~ 底部	-	18.6	12.8	3.9	-	-	赤褐	赤褐		堅緻	精良	底部に三角形のへら書きがある。
147	陶器	甕	頸部付近	-	-	-	-	-	-	釉調 灰オ リーブ	胎土調 灰	灰	堅緻	1mm以下の白色の砂粒を含む。	備前。
148	陶器	水甕	口縁~ 底部	-	32.9	20.9	17.1	-	-	釉調 浅黄	胎土調 灰	灰	堅緻	精良	瀬戸・美濃。
149	陶器	三足鉢	口縁~ 底部	-	16.2	13.8	-	-	-	釉調 暗褐	胎土調 灰	灰	堅緻	精良	瀬戸。
150	陶器	有足皿	底部付近	-	-	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 浅 黄橙	浅	堅緻	精良	志野。
151	陶器	サヤ	口縁~ 底部	-	19.5	14.0	9.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	赤褐	茶褐		堅緻	精良	
152	陶器	播鉢	口縁~ 体部	-	30.8	-	-	ケズリ	ナデ	橙	橙		堅緻	1mm以下の白色の砂粒を含む。	関西系か。
153	陶器	播鉢	完形	-	14.0	8.1	5.6	ナデ	ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐		堅緻	2mm以下の白・黒・橙色の砂粒を含む。	関西系か。
154	陶器	播鉢	口縁~ 底部	-	30.0	10.4	10.3	ナデ	ナデ	灰赤	褐灰		堅緻	5mm以下の白色の砂粒を含む。	備前。
155	瓦	軒丸	-	-	-	-	-	-	-	灰	灰白		良好	1mm以下の灰・白色の砂粒を含む。	
156	瓦	軒丸	-	-	-	-	-	-	-	灰	灰		良好	3mm以下の灰色の砂粒を含む。	
157	瓦	軒丸	-	-	-	-	-	-	-	灰	灰白		良好	1mm以下の灰・白色の砂粒を含む。	
158	瓦	鳥衾	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	灰		良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。	
159	瓦	軒平	-	-	-	-	-	-	-	灰	灰		良好	1mm以下の光沢砂粒を含む。	
160	瓦	軒平	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	暗灰		良好	1mm以下の白色の砂粒を含む。	
161	瓦	軒平	-	-	-	-	-	-	-	灰白	灰		良好	2mm以下の黒色の砂粒を含む。	
162	瓦	軒平	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	暗灰		良好	1mm以下の白・灰色の砂粒を含む。	
163	瓦	軒平	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	灰		良好	1mm以下の灰色の砂粒を含む。	
164	木器	漆器椀	-	-	12.2	-	-	-	-	赤色漆	赤色漆		-	内外面：下地柿渋（木炭粉混） 材：クリ	顔料にベンガラを使用。
165	木器	下駄	-	-	長15.4cm・幅7.0cm・厚さ4.6cm					-	-	-	-	材：コウヤマキ	
166	木器	匙	-	-	長21.0cm・幅4.9cm・厚さ1.1cm					-	-	-	-	材：モミ属	
167	鉄器	-	-	-	現存長4.5cm・幅2.2cm・重さ27.0g重					-	-	-	-		
168	鉄器	釘	-	-	現存長7.5cm・幅1.1cm・重さ42.3g重					-	-	-	-		
169	鉄器	釘	-	-	現存長8.4cm・幅0.6cm・重さ14.2g重					-	-	-	-		
170	鉄器	釘	-	-	現存長5.8cm・幅0.8cm・重さ8.2g重					-	-	-	-		
171	鉄器	錠	-	-	現存長9.1cm・幅2.5cm・重さ45.2g重					-	-	-	-		
172	土器	土鍾	-	-	重量38.2g重					橙	-	良好	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む。		
173	土器	土鍾	-	-	重量8.0g重					灰白	-	良好	0.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む。		

第7表 高鍋城三ノ丸跡 出土遺物観察表⑤

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
174	土器	土鍾	—	—	重量 8.3g 重					にぶい赤橙	—	良好	0.5mm以下の灰・白色の砂粒を含む。	
175	土器	土鍾	—	—	重量 5.9g 重					にぶい黄橙	—	良好	0.5mm以下の灰・茶色の砂粒を含む。	
176	土師器	燭台	口縁～底部	—	5.9	7.3	2.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の茶色の砂粒を含む。	
177	銭貨	寛永通宝	—	—	径 2.3cm、重量 3.2g 重			—	—	—	—	—		
178	鉄滓	—	—	—	重量. 262.0g 重			—	—	—	—	—		

は復元

【註】

(1)菅原1995 549項

【参考・引用文献】

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

森田 勉1981「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究』No.1

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2

国立歴史民俗博物館1993『日本出土の貿易陶磁』西日本編3

山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』

山本信夫2000「陶磁器の分類」『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』大宰府市の文化財第49集

菅原正明1995「瓦器・黒色土器の焼成方法」『概説 中世の土器・陶磁器』

藤澤良祐1995「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』

第IV章 付 編

高鍋城三ノ丸跡出土材の樹種同定と年輪年代法適用の検討

鳴門教育大学大学院学校教育研究科

米延仁志

1. はじめに

本稿では高鍋城三ノ丸跡出土材の樹種鑑定と年輪年代法による年代測定の可能性について検討した結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は木口円板3枚からなる（以下、サンプルA, B, Cと命名）。年輪年代法では試料の年輪数が100を超えていることが望ましく、50未満では測定対象から除外することが通常である。サンプルはいずれも年輪数が40以下であり、明らかに年輪年代法に適用できない。そこで3試料とも木材組織の光学顕微鏡観察による樹種同定を行い、最も年輪数の多いサンプルAのみスギ標準年輪曲線による年代測定を試みた。標準年輪曲線には高知県魚梁瀬産スギ約20個体から作成したものをを用いた。方法の詳細については参考文献¹⁾を参照されたい。

3. 結果と考察

3. 1 高鍋城三ノ丸出土材の樹種

試料の樹種は全てスギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) であった。図1に試料Aの木材組織の写真を示した。解剖学的な所見は以下のとおり。木口面：早晚材の移行が急で、晩材幅が広い、板目面：単列放射組織、まさ目面：放射仮道管が無く、分野壁孔は典型的なスギ型。

3. 2 年輪年代法適用の試み

図2にサンプルAの年輪幅変動を示した。年輪数は3試料中最も多い41であったが、これでも年代測定に十分とは言えない。試みとして標準年輪曲線とのクロスデーティングを試みた。図3に統計的クロスデーティングの結果を示した。年輪年代法では試料と標準曲線との相関をStudentのt値により評価し、目安として $t=3.5$ を超える年代候補について、目視でパターン的一致を確認する。通常、統計的クロスデーティングの段階で1つ、またはごく少数の年代候補に絞られるが、今回試みた試料では残念ながら、t値に明瞭なピークが見られず、目視による年輪曲線の類似もみられなかった。こうした結果の原因としては、先ず年輪数が100を超える年輪年代学に適した試料が得られなかったことがあげられる。また九州産スギ材の標準年輪曲線がこれまでに作成されていない。これまで筆者及び共同研究者は木曾ヒノキ、秋田スギなどでも標準曲線を作成してきた。今回は最良の妥協を鑑み、比較的同じ気候区分に属する高知県産スギを用いた。九州地方は老齢のスギ林が現存しておらず、今後こうした遺跡出土材を数多く収集し年輪曲線の充実を行う必要がある。

参考文献：¹⁾米延仁志、「年輪考古学」、『環境考古学ハンドブック』（安田喜憲編著）、

pp. 254-261、朝倉書店（2004）（または<http://dendro.naruto-u.ac.jp/~yn/dendro/>）

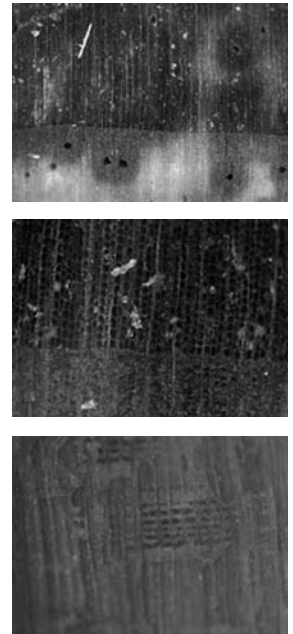


図1 高鍋城三ノ丸出土材の木材組織。上から木口面(×50)、木口面(×200)、まさ目面(×400)

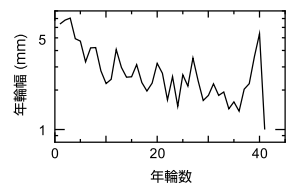


図2 高鍋城三ノ丸出土材(サンプルA)の年輪幅変動

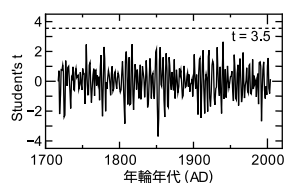


図3 統計的クロスデーティングの結果

第V章 高鍋城三ノ丸跡の変遷

～まとめにかえて～

第1節 はじめに

高鍋城は、日向の土着の豪族である財部土持氏が代々居城したと伝えられる（高鍋町教育委員会1975）。当時、「財部」と称されていた当地を土持氏が勢力下においたのは9世紀の後半頃のことといわれ、高鍋城がその当時から城郭として成立していたとは考えるのは無理があるが、当時の領有関係から財部土持氏が築造したものと考えられている（宮崎県教育委員会1999）。

その後、戦国期において土持氏は伊東氏との抗争に敗れ、長禄元（1457）年に高鍋城（当時は財部城と呼ばれた。）は明け渡される。以後、伊東48城の一つに数えられる。

16世紀には島津氏の勢力が強くなり、高鍋城も天正5（1577）年に島津氏の手落ちることとなるが、天正15（1587）年の豊臣秀吉による島津征伐の結果、功のあった秋月氏が日向を分封されることとなり、当地も秋月氏の所領となった。当初、櫛間城（申間市）を居城としていた秋月氏であったが、慶長9（1604）年、秋月種長の代から江戸時代を通じ高鍋城が秋月氏の居城となる。

寛文9（1669）年から延宝元（1673）年にかけて大改修を行っており、現在確認できる縄張りはこれ以降の近世城郭としてのものであることは、注意が必要であろう。

第2節 秋月以前

先述のとおり、土持、伊東、島津と築城から数百年の間に領主が変わっており、今回の調査地がどの時代にどのような状態であったか詳らかではない。

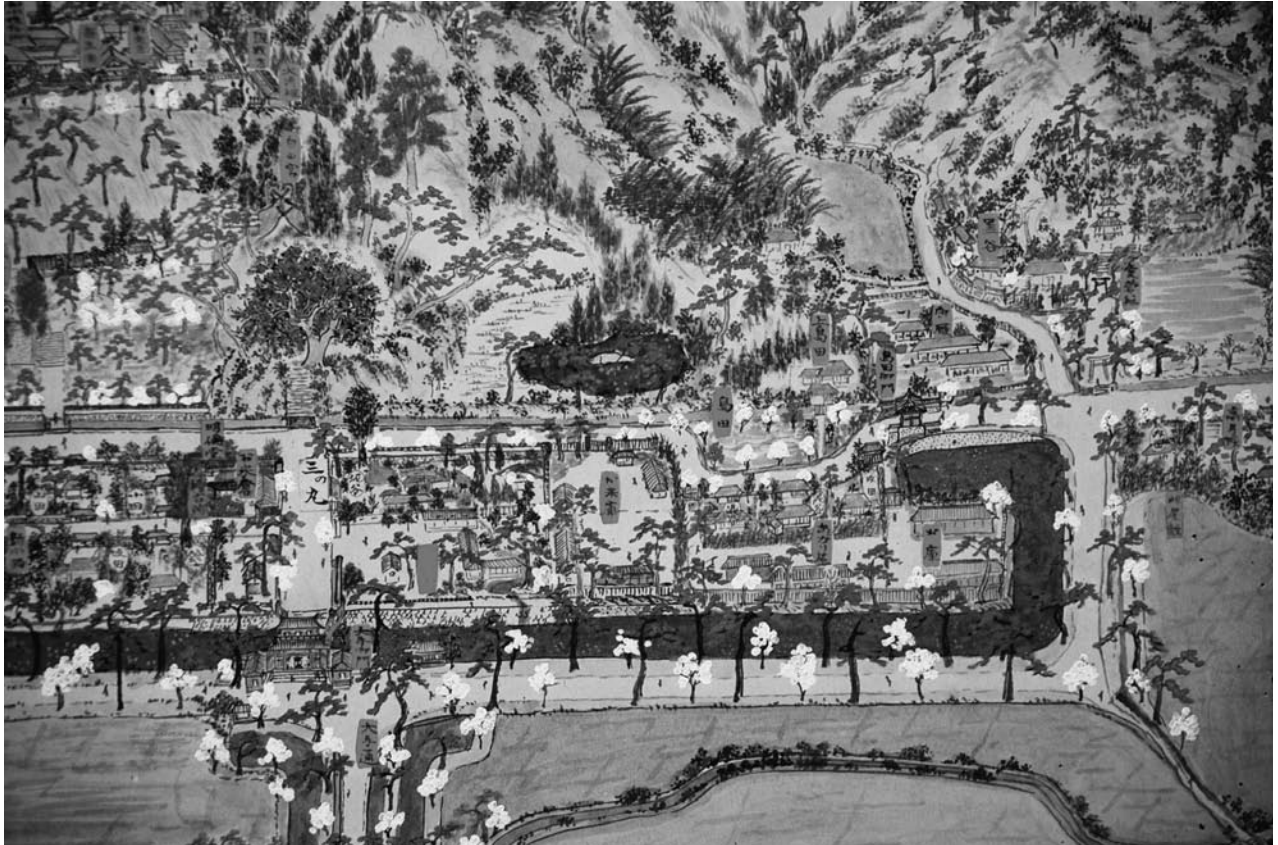
調査で確認できた秋月以前の遺構は、流路跡、1号溝状遺構、2号溝状遺構のほか、時期不明のピット群の一部がこれに当たるだろうか。

いずれにしても、城域内であることを明確に示す遺構は確認できていない。13～14世紀頃には埋没していたと考えられる流路跡、14～15世紀には廃棄されていたと考えられる1号溝状遺構、15～16世紀頃に廃棄されたと考えられる2号溝状遺構の存在からは、築城当時においては丘陵裾部に広がる湿地帯による天然の要害として機能していた箇所や、丘陵裾部に広がる居住区の端部と考えられるかもしれない。

また、1号溝状遺構が流路跡とほぼ並行するのに対し、2号溝状遺構が現在の区画に平行する形で掘削されていることは、あるいは、15世紀代に調査区周辺が城域に組み込まれた結果といえるかもしれない。

第3節 外堀の整備

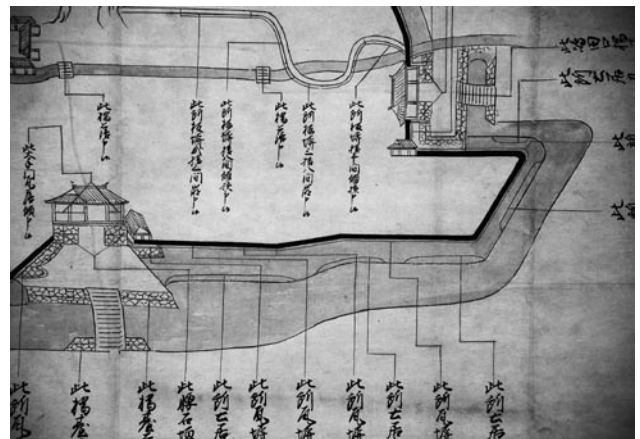
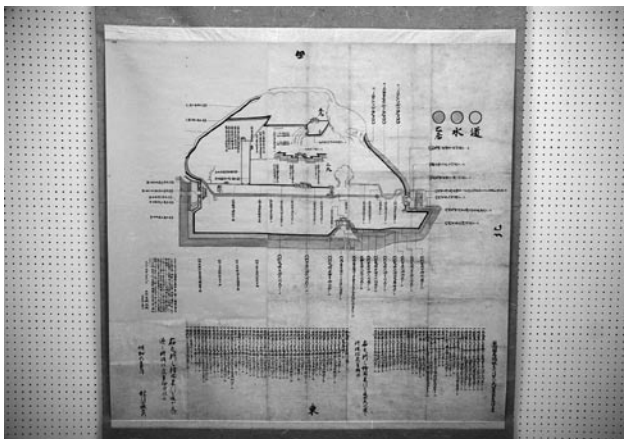
高鍋城は、寛文・延宝の大改修により近世城郭化している。この時、外堀の整備も行っているが、わずか一ヶ月の工期で完成している。現状では濠の法面全てに石垣が組んであるが、同時代資料ではないものの古図等には石垣は大手門周辺などの一部にしか描かれておらず、古い写真等にも石垣は一部しか確認できない。最初の整備の時点でどの程度の工事が行われたかは不明であるが、以上のようなことから、目立つ部分にのみ大きな改修が行われ、その他の部分は掘削と法面の整形程度に終わっていたと考えたい。



山名紫川画「高鍋城及び城下町絵図」

第4節 三ノ丸の拡張

高鍋城は他の城郭の類に漏れず江戸期に何度も災害を被っている。明和の大地震で被った被害については、「高鍋城明和六年大地震破損覚書絵図」に詳細が記してある。これによると、三ノ丸周辺では板塀が倒れるなどの被害があったことがわかる。高鍋城全体でも比較的大きな被害があったようである。今回確認された18世紀頃の造成土については、この時の改修工事に伴うものかもしれない。19世紀の造成については、幕末頃に明倫堂の敷地造成があったようであるので、この時のものと考えたい。



「高鍋城明和六年大地震破損覚書絵図」

【引用・参考文献】

高鍋町教育委員会1975『高鍋城』高鍋町の文化財第二集

宮崎県教育委員会1999「高鍋城〔舞鶴城〕」『宮崎県中近世城跡緊急分布調査報告書』Ⅱ詳説編

圖 版



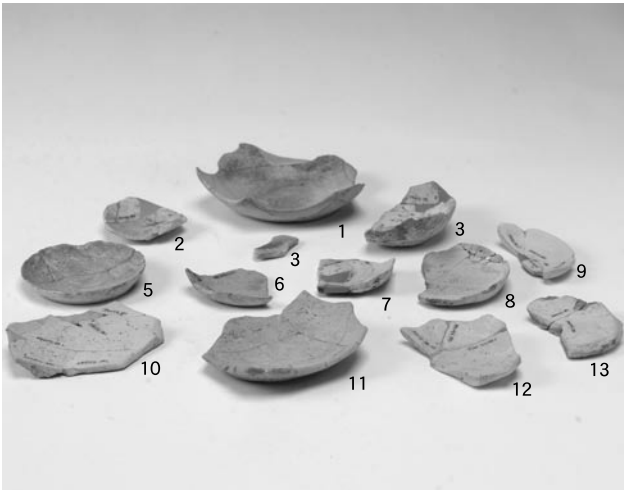
図版 1-1 高鍋城周辺空中写真（昭和22年米軍撮影）



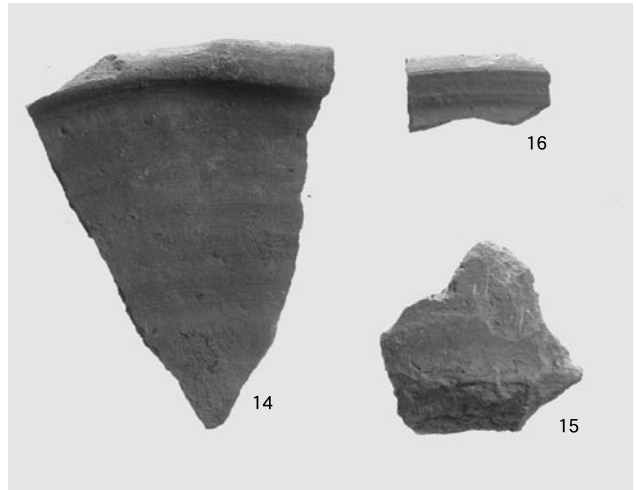
図版 1-2 調査区全景



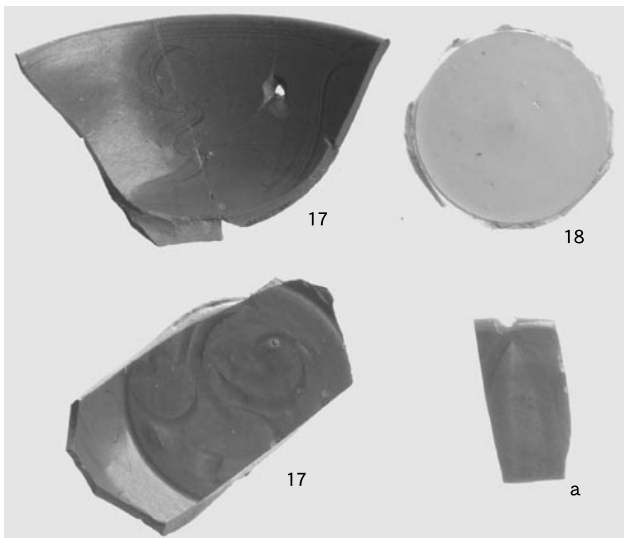
図版 1-3 流路跡土層断面



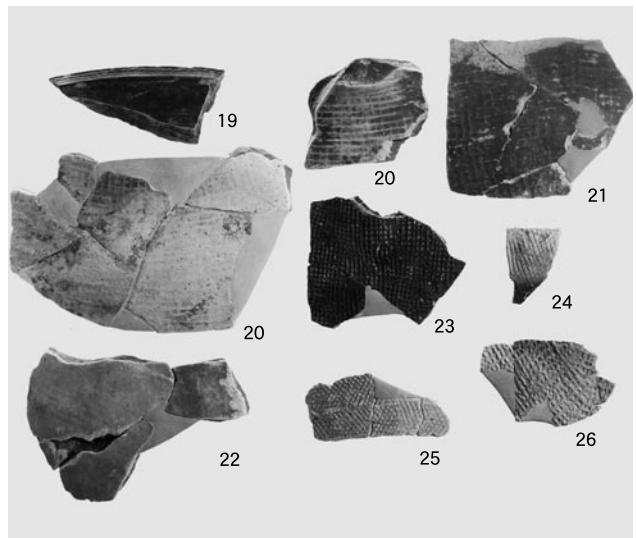
図版 2-1 流路跡出土遺物① (土師器)



図版 2-2 流路跡出土遺物② (須恵器)



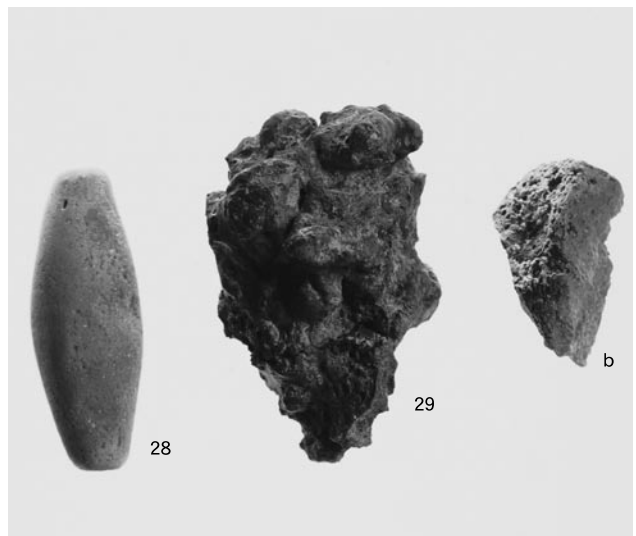
図版 2-3 流路跡出土遺物③ (輸入陶磁器)



図版 2-4 流路跡出土遺物④ (瓦質焼成土器)



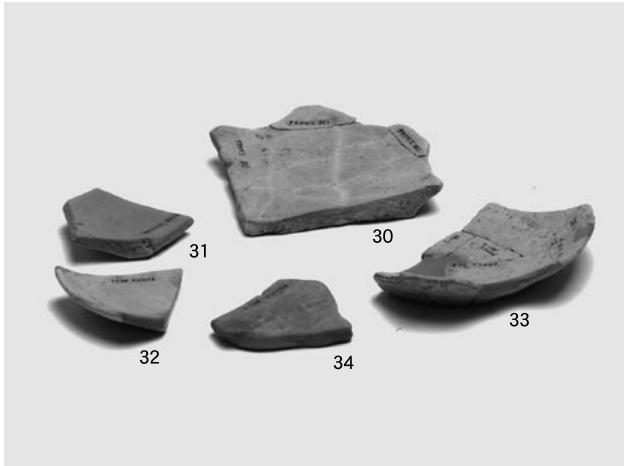
図版 2-5 流路跡出土遺物⑤ (国産陶器)



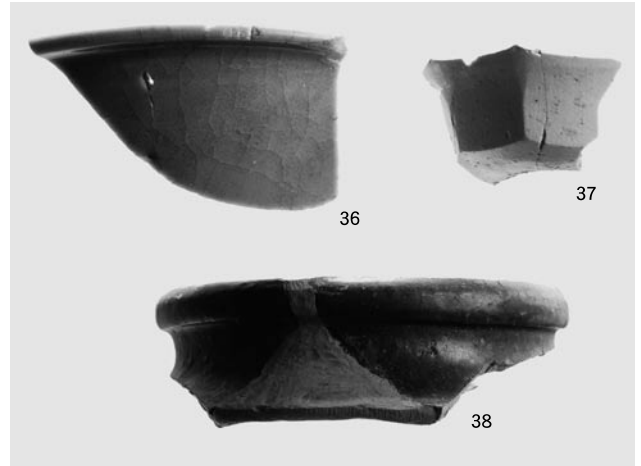
図版 2-6 流路跡出土遺物⑥ (その他の遺物)



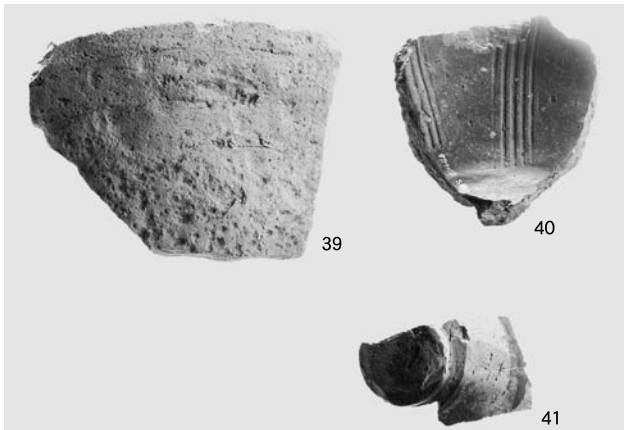
図版3-1 1号溝状遺構



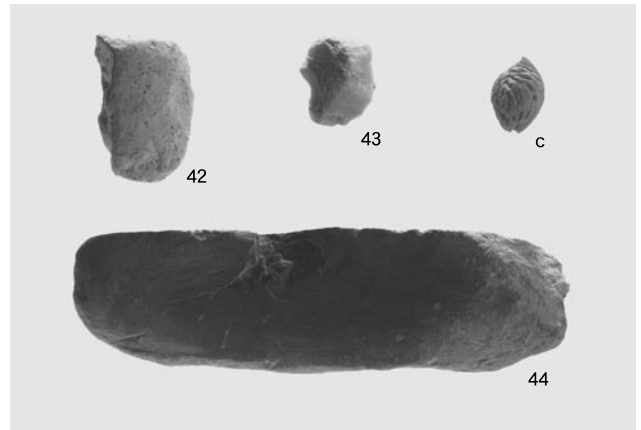
図版3-2 1号溝状遺構出土遺物①（土師器）



図版3-3 1号溝状遺構出土遺物②（輸入陶磁器）



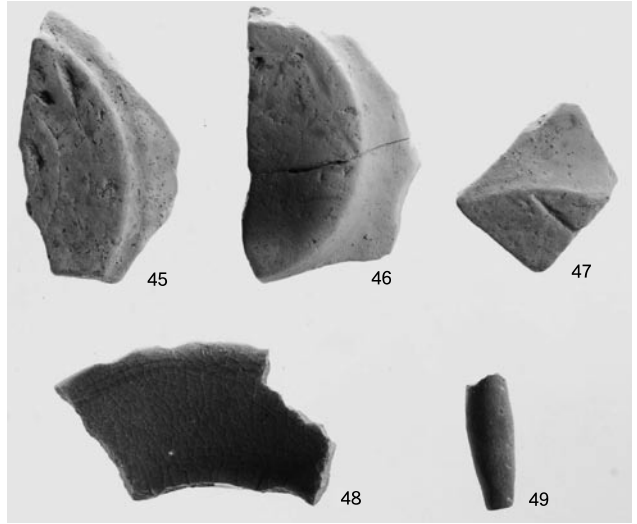
図版3-4 1号溝状遺構出土遺物③（瓦質焼成土器・国産陶器）



図版3-5 1号溝状遺構出土遺物④（その他の遺物）



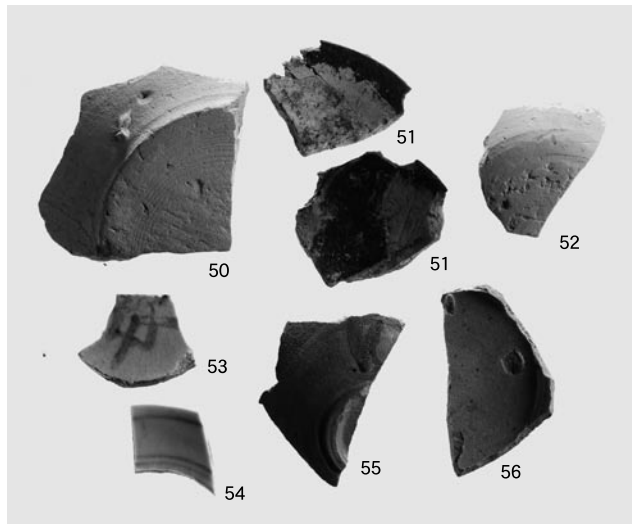
図版4-1 調査区全景（調査区右端が2号溝状遺構）



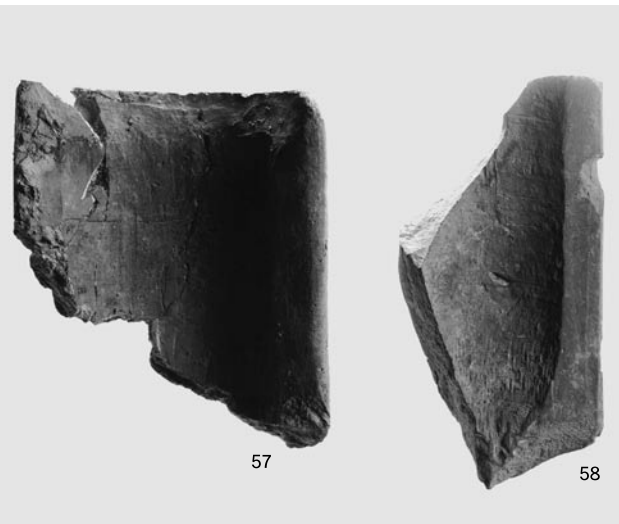
図版4-2 2号溝状遺構出土遺物



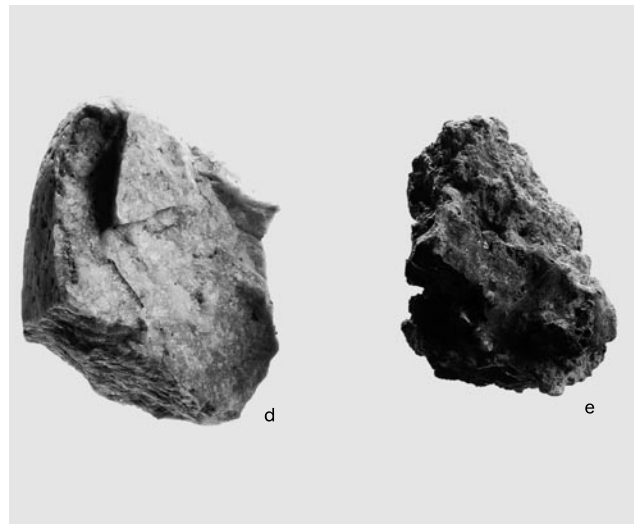
図版4-3 3号溝状遺構



図版4-4 3号溝状遺構出土遺物①（土師器・陶磁器）



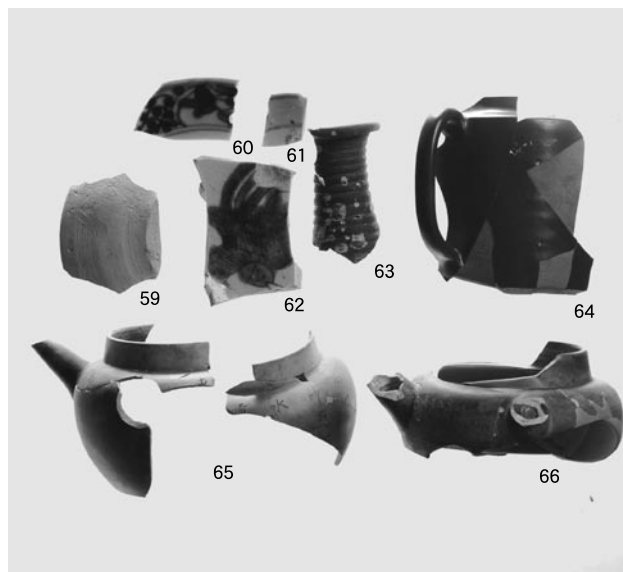
図版4-5 3号溝状遺構出土遺物②（瓦）



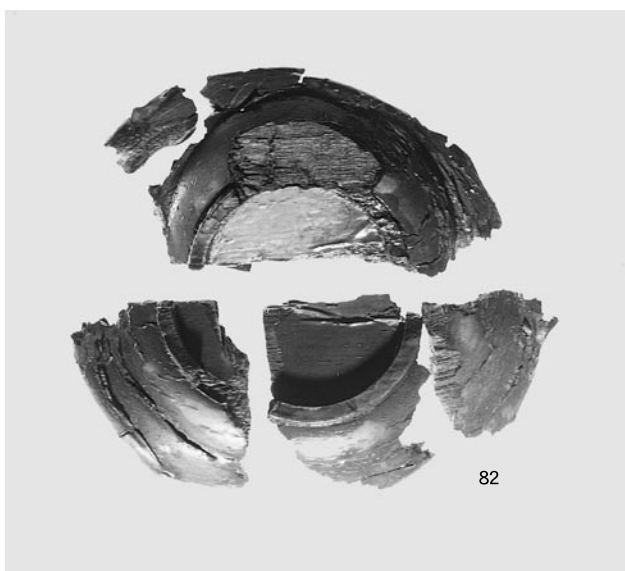
図版4-6 3号溝状遺構出土遺物③（石灰岩塊・鉾滓）



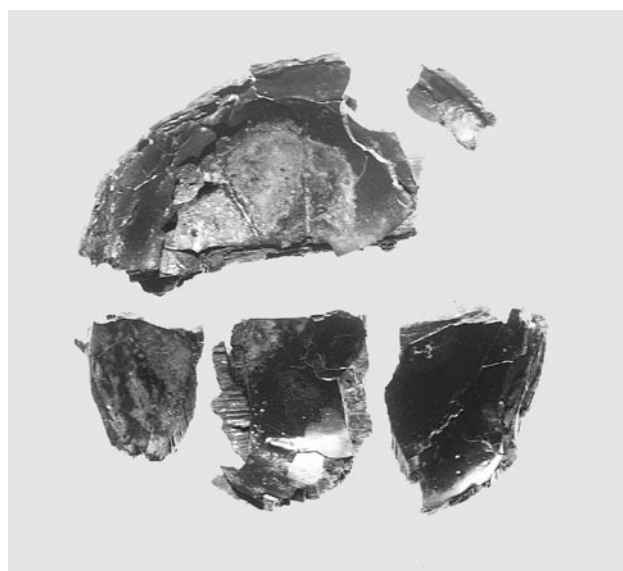
图版 5-1 土坑出土丸太材



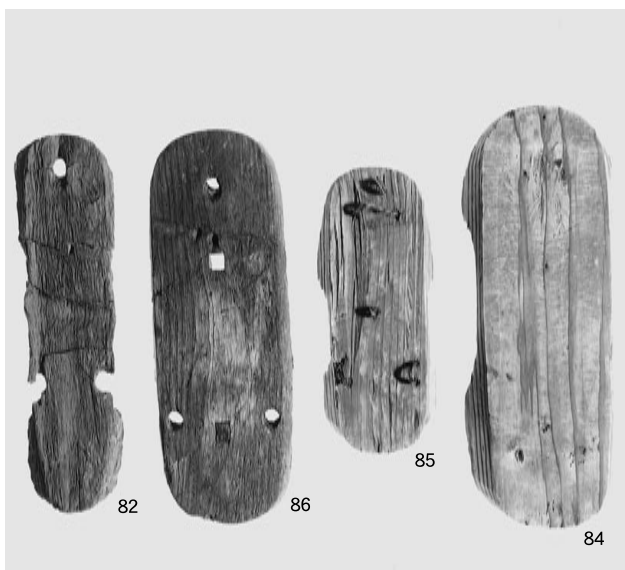
图版 5-2 土坑出土遺物①（土師器・陶磁器）



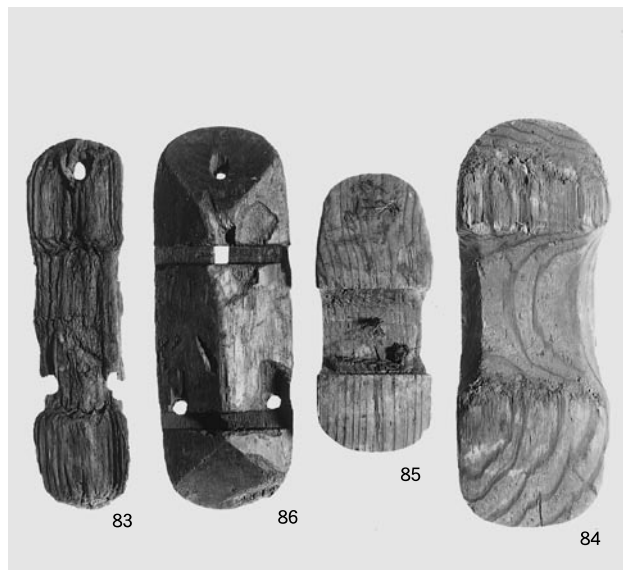
图版 5-3 土坑出土木製品 漆器（外）



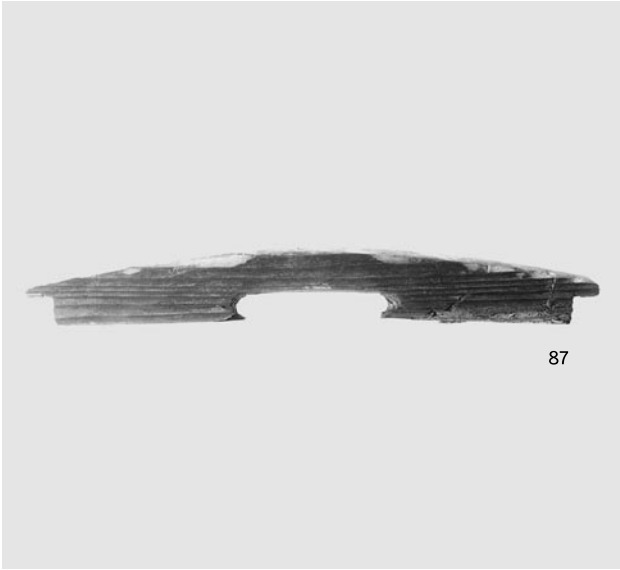
图版 5-4 土坑出土木製品 漆器（内）



图版 5-5 土坑出土木製品 下駄（表）



图版 5-6 土坑出土木製品 下駄（裏）



图版 6-1 土坑出土木製品 把手



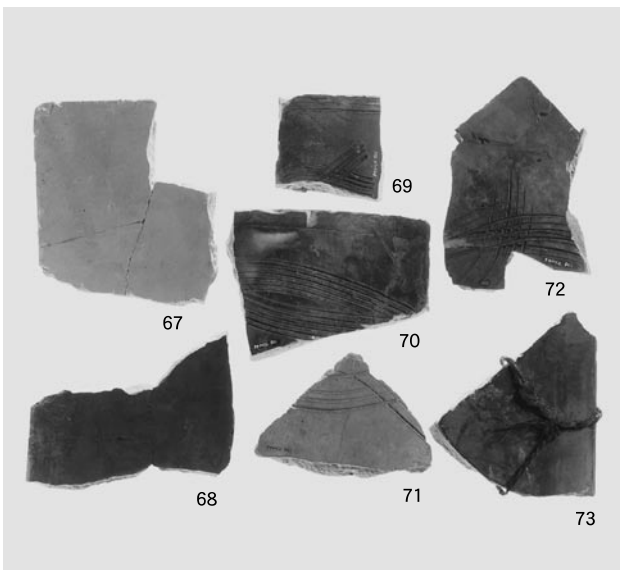
图版 6-2 土坑出土木製品 台



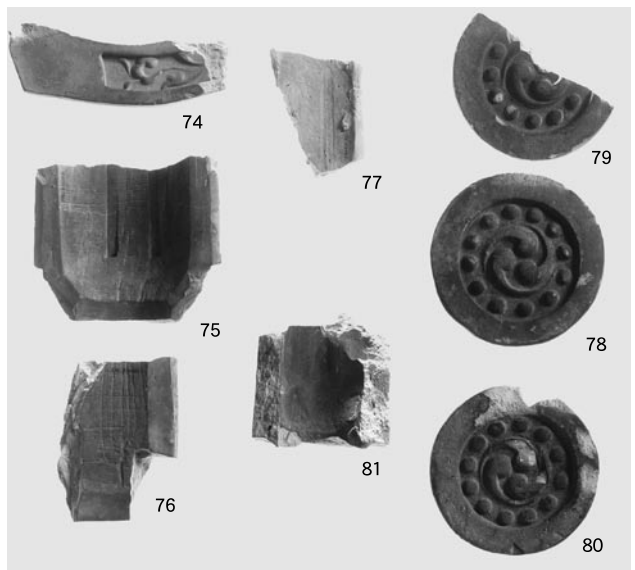
图版 6-3 土坑出土木製品 箱蓋 (表)



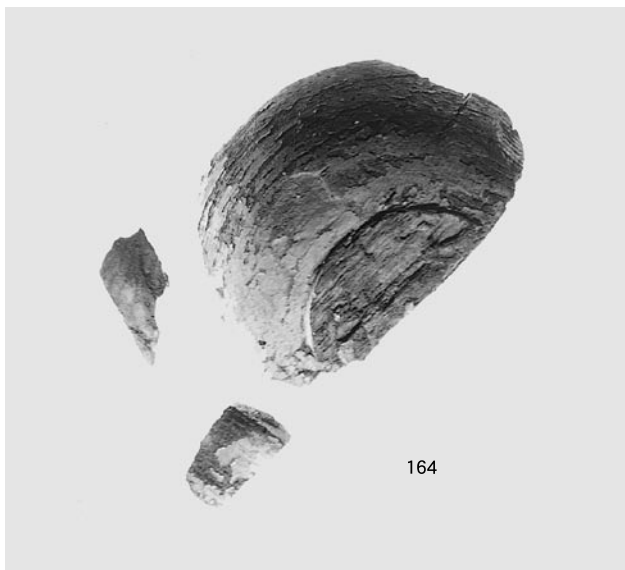
图版 6-4 土坑出土木製品 箱蓋 (裏)



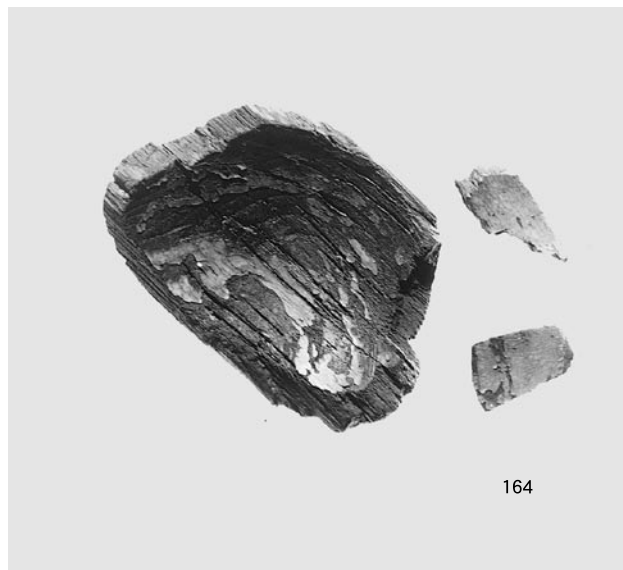
图版 6-5 土坑内出土瓦①



图版 6-6 土坑内出土瓦②



图版7-1 包含層出土漆器（表）



图版7-2 包含層出土漆器（内）



图版7-3 包含層出土下駄（表）



图版7-4 包含層出土下駄（裏）



图版7-5 包含層出土匙



图版7-6 包含層出土遺物（華南三彩）

報告書抄録

ふりがな	たかなべじょうさんのまるあと							
書名	高鍋城三ノ丸跡							
副書名	高鍋農業高校実習施設緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第186集							
編著者名	和田理啓・森田利枝							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月	2009年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかなべじょうさんのまる 高鍋城三ノ丸 あと 跡	みやざきけんこくぐん 宮崎県児湯郡 たかなべじょうおおあざうわ 高鍋町大字上 え 江1339-2	45401	3035	31°57'4"	131°0'27"	20080512 ～ 20080718	990㎡	高鍋農業高 校実習施設 緊急整備事 業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
高鍋城三ノ丸跡	城館跡	中世・近世		流路跡・溝 状遺構・土坑	土師器・須恵器・陶 磁器・木器・漆器			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第186集

高鍋城三ノ丸跡

高鍋農業高校実習施設緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985 (36) 1171 FAX 0985 (72) 0660

印刷 株式会社 都城印刷

〒885-0055 都城市早鈴町1618番地

TEL 0986 (22) 4392(代) FAX 0986 (22) 4891
